**№23　テーマ『人格の大きさをつくる精神的原理』**

**講話日2007年4月23日**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：ご苦労さまです。まあ、本当にもう春本番というかですね、吹く風もあまり冷たさを感じなくなってきて、いい季節になってきました。まあ、今日は新入社員の方も何人かいらっしゃるということなので、まあ、そういうこともちょっと含みながら、お話をさせてもらいたいと思います。今日のテーマは「人格の大きさをつくる精神的原理」ということで、まあ、前回、人格の大きさをつくる実践的原理ということでお話をしましたので、その延長線上の話なんですけど、まあ、とにかくこの人格を磨くということはですね、これはやっぱり、このプロとして社会の中で仕事をしていくうえで避けることのできない大きな課題だと思います。で、このいろんな人と関わりながらですね、やはりこの仕事というのは進んでいくわけであって、社内の人間関係もそうですけど、この社会でのいろんなお客さまと関わっていかなければならない。そのときに、やっぱり、そのお客さんのほうから頼りないなと思われたりですね、仲間からでも、なんかちょっとこう信頼しにくい、まあ、そういうふうな感じになってくると、やっぱり、どうしてもこう、会社においてですね、仕事がしづらい、人間関係がうまくいかないということで悩み始めてきますので、まあ、そういう意味においても、このいろんな人と関わりながら、自分を成長させていくという、まあ、そういうこの自分の成長のさせ方というのは非常に大事なね、やっぱり心構えだと思います。**

**で、会社というのは、いろんな性格の人もいるし、いろんな考え方の人もおりますので、そういうことで、このいろんな人と関わりながらですね、いろんな人とちゃんと仲よくやっていくことができる自分。それはやっぱり、人間性の幅をつくるとかですね、人間性の豊かさとかというような、そういうものがこう、まあ、要求されてくることになるわけですね。そういうことで、一人一人、こう、まあ、いろんな人と関わりながらですね、このいろんな人と関わることができる自分、いろんな人と仲よくやっていくことができる自分というものを、まあ、このつくっていくためにですね、それもこう自分の修行というか、自分を本物の人間に成長させていく。まあ、そういうこの修行の場というふうに考えてですね、そういう人間関係のさまざまな問題も嫌がらずにですね、それも自分を鍛える、この重要なきっかけなんだという、まあ、そういうこの思いでそういう人間関係の問題も乗り越えていってもらいたいと思うんですね。で、そういうことを通して、この人格を磨く、自分の人間性を成長させるということがですね、まあ、実現できるんだと思います。**

**で、そういうこの自分を鍛えていくということをする場合ですね、どういうふうなことを考えながら、自分を成長させていったらよいのか。本当、プロとしての生き方というものをですね、これから身に付けていかなければならない。すなわち、このお客さんから金をもらい、会社から金をもらって仕事をするということがプロですけども、その意味では、金をもらえる仕事をする、金の取れる仕事をする。金をもらって恥ずかしくない、まあ、そういう自分をつくっていくっちゅうことがですね、まず会社に入ったら最初に要求される目標であります。で、こんだけのことをしてくれたんだ。だから、これぐらいの金を払うのは当然だろうというふうにですね、客に思わせなければならない。また会社から金をもらう場合でも、やっぱり、これだけの仕事をしたんだから、これぐらいの給料は当然やなと、払う側でも思ってもらえるような、もうそういう仕事の仕方をですね、目指していかなければなりません。金の出し惜しみをさせるようじゃ、プロじゃないと。やっぱり、さすがにプロだなとこう言われてですね、こんだけのことをしてくれたんだから、これぐらいの金は当然、要求される金は当然だ。もうちょっとなんかこう、チップでもやらんと気が済まんかなと、金を払う側に思わせるほどのですね、まあ、そういう仕事をして、初めてプロという、そういうこの、まあ、誇りを持ったですね、仕事ができることになるんじゃないかと思います。**

**まあ、そういう意味においてもですね、自分自身の人間性なり、仕事の仕方というものがですね、客を感動させる。また、一緒に仕事をしていく仲間にもですね、すごいやつやなと、こう言われるというようなね。まあ、そういうふうなことになってくると、本当にプロとしての輝き、自信というのがこうだんだんできあがっていきます。まあ、そういうことにおいても、この人格を磨くということは、非常に大事なですね、仕事をしていくうえでのテーマというふうにね、考えなければなりません。で、まあ、これまでずっとこの人格を磨くというテーマでですね、人格の高さをつくるとか、人格の深さをつくるとかというふうに話してきました。で、人格というこの人間の格を成長させるということは、どういうことをすることなのかといったら、人格には、高さ、深さ、大きさという、そういう３つのですね、魅力がある。人格に高さという、そういう領域と、深さという領域と、大きさという領域がある。で、そういうことをこう、ちゃんとこう自覚するとですね、人格を磨くっちゅうことは、この人格の高さをつくり、人格の深さをつくり、人格の大きさをつくっていくという、そういう意識を持ってですね、いろんなことをすることが人格を磨くということなんだなということが、まあ、わかってくるわけですよね。**

**まあ、そこでそういう順序に従ってですね、人格の高さをつくるためにはどうしたらいいのかということを話してきましたし、人格の深さをつくるためにはどうしたらいいのかっちゅうことを話してきました。で、前回は「人格の大きさをつくる」というテーマで、この人格の大きさができてくるためのね、まあ、そういう実践的なプロセスをお話をしたわけです。で、この具体的には、人格の大きさというのは、器が大きいとか、度量が大きいとかですね、包容力があるとか、統率力があるというのが、まあ、人格の大きさというものの具体的な姿なんですけども、まあ、そういうこの人格の大きさというものをですね、つくっていこうと思ったら、その基本原理はなんなのかといったらですね、この本当に人格の大きさというものを実力としてですね、つくっていこうと思ったら、人間関係の修羅場というものを乗り越えるという体験が必要であると。で、人間関係の修羅場というのは、まあ、対立ということなんですけど、対立を乗り越えていくという、この実践的なですね、まあ、そういう努力をして、その結果を出したとき、それが実力として自分の身に付いてくる。そのことによって、だんだん、この対立を乗り越えることによってですね、いろんな人とこの対立を乗り越えて関わっていくことができますので、その意味で、少しずつこの人間の大きさというものができていくということになるわけですね。**

**その意味では、この対立とはいったいなんなのかというね、この考え方が違うとかですね、感じ方が違うとか、立場が違うとか、どうもその気持ちが合わんとかね。そういうことで、この対立というのが、嫌なやつやなっちゅって、こう対立が生じてくるんですけど、だけど、その対立とはいったいなんなのかといったら、対立というのは、相手が自分にないものを持ってるから対立するんで、自分と同じ内容のものを相手が持っておったら、対立はしないと。で、人間が成長するためには、自分にないものを誰かから学ばないと、自分は成長できないんだ。だから、われわれはその気の合う仲間と付き合うのも大事なんだけど、50％は気の合わない人とも付き合ってですね、そして、その自分にないものを相手から学び取って、そして、この自分をより大きな人間に成長させていくという、そういうこの努力もですね、この社会の中で生きてくうえでは、どうしても避け難い、この問題であります。そういうことを考えたならばですね、対立というものをわれわれは嫌がらないで、対立とはなんなのかということをちゃんと捉える必要がある。**

**ということは、どういうことなのかといったら、対立というのは、この自分が成長するために学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを教えてくれる現象が対立なんだ。対立を体験することなしには、自分にないものを持ってる人間が誰であるかを知ることができない。対立というのは、自分が成長するために学び取らなければならないものを持ってる人間が、今、自分の目の前におるんだということを教えてくれる現象が対立なんだ。だから、対立という状況になったら、ああ、俺はこの人から何かしら学び取っていかなきゃならないんだな。この人から何かを学び取らないと、俺は人間としてもう一回り大きな人間に成長できないんだな。何を学び取ろうか。まあ、そういうふうなですね、意識にね、対立という状況にぶち当たったら、そういう意識になっていかなければならない。そのことによって、われわれは嫌なやつを、嫌なやつやという目で見ないでですね、この人から何か俺は学ばないかんのやな。まあ、そういう気持ちになってくると、その人を見る目が違ってきますからね。嫌なやつやなという目で見てるのとですね、この人から何か教えてもらわないかんのやなと、そういう目で見るとですね、完全に人間関係は違ってきます。もう目一つで人間関係が決まるわけですよね。**

**人間関係を決める基本は、その人と接しておるときの目つき、表情、態度、それが人間関係のほとんどを決定するというふうに、まあ、いわれております。人間関係を決めるのは目だ。目を磨き、目を成長させる。非常に大事なこれは社会の中でですね、生きていくうえでの、この修行のしどころというか、鍛えどころなんですよね。自分の目を鍛える。まあ、そういう意味で、この対立というものをですね、どういうふうに捉えるか。対立というのは、この自分が学び取らなければならないものを持ってる人間が、今、目の前におるんだ。自分にないものを持ってる人間が、自分にないものを持ってる人間が、今、自分の目の前にいる。そのことを教えてくれる現象が対立なんだ。自分が学び取らなければならないものを持ってる人間が、今、自分の目の前にいる。それを教えてくれるのが対立なんだ。まあ、そういうふうに捉えることによって、相手を敵として見たり、相手に敵対心を持ったり、相手に反感を持ったり、そういうこの意識でその人に接するんじゃなくって、その人から何か学び取らなきゃならない。まあ、そういう気持ちになることによって、相手にこの与えるですね、こちらの印象というか、まあ、そういうものが全然違ってきてですね、そして、この人間関係はよくなっていく。そして、この従来は嫌なやつやなと思っとったですね、そういう気の合わん人ともですね、だんだんと気持ちを合わせて生きていくことができる、そういう人間性の豊かな、大きさのある自分ができていくっちゅうことにもなるわけですね。まあ、そういう意味で、この実践的な原理としてはですね、この対立という現象をどう解釈するか。どう理解するかということは、非常に大きなこの原理的課題でした。だから、前回はそのことを相当、詳しくお話をしてですね、そういうことを、まあ、ベースにしながら、器ができ、度量ができ、包容力ができ、統率力という、そういうところまで人間はどんどん、どんどんですね、大きさのある人間に成長できるんだっちゅうことを話しました。**

**今日はですね、そういう実践的原理に加えてですね、意識における大きさ、精神的な大きさ、心の大きさというものをですね、つくっていくための意識的努力、意識的な原理というのがどういうもんなのかということを今日はお話をするという、まあ、そういうこの段階に入るわけですね。そこで、精神的な大きさ、意識の大きさ、心の広さ、そういう面からですね、人間の大きさというものをつくっていこうと思ったら、まずはどういうことがですね、この課題として考えられるのか。まずはですね、その第２番目、レジュメの第２番目に書いてあるように、全体への問いと、全体への視野を失わないことということがですね、まずは大きさを、意識的な面からつくっていくための基本的なこの課題になってきます。**

**全体への問いというものを失わないということはどういうことなのかといったらですね、自分はこの自己中になってないだろうかと。自分中心で、身勝手な状態になってないだろうか。家族みんなのことを考えて、俺は生きてるだろうか。会社全体のことを考えながら、俺は仕事をしてるだろうか。自分のやってることに偏りはないだろうか。えこひいきはないだろうか。ねえ、そういう常に全体というものをね、意識しながら、自分がこういろんなことに関わってるか。これがですね、やっぱりその人間の気持ちというものを、この偏りのある、あるいはこの小さなことにこだわった、まあ、そういうこだわりや執着のあるような、まあ、そういうこのせせこましい生き方からですね、自分を解放して、そして、この常に全体やみんなのことを考えるという、そういうふうなですね、愛ある、血の通った温かな心というね、まあ、そういうものをこうつくり出していく。非常に大事なこれは、まあ、課題であります。**

**全体への問いを失わないこと。常に全体というものを意識しながら、その中で俺はどういうことをしたらいいだろうか。みんなのことを考えてるか。自分の身勝手になってないだろうか。あるいは、この誰かにこのあまり目を注ぎ過ぎて、みんなとのあいだにバランスが取れてないというですね、アンバランスになってないだろうか。ちゃんと平等にみんなことを見てるだろうか。まあ、それが全体への問いということですね。そういうこの全体というものを意識しながらですね、自分というものを見つめてみると、だんだん、だんだん、自分のこの生き方がですね、大きさを持ってくるという、まあ、そういうことになってきます。で、そういうことを通して、全体への視野を失わない。常に全体というものを意識しながらですね、その中で俺は何をしたらよいのか。全体の中、会社全体の中で、今、自分がこのしなければならない役割というのはいったいなんなんだろうか。自分がこの場で、その役割を果たさなかったら、会社全体はどうなるんだろうか。みんなはどういうふうに困るんだろうか。まあ、そういうふうなことをですね、考える。まあ、それが全体への視野を失わない生き方ということにもなってくるわけですね。**

**そういう全体というものを意識しながら、自分というものをその中で捉えていく。まあ、そういうことをするとですね、だんだん、だんだん、自分の生き方の中に大きさが出てきます。会社だけじゃなくって、家でも家族全体のことを考えて、家族みんなのことを考えて俺は生きてるだろうか。あるいは、この自分の家だけじゃなくて、親戚全体のことを考えて自分は生きてるだろうか。社会全体のことを考えながら、自分は行動してるだろうか。まあ、これは現実的に環境問題とかですね、そういうふうなことを考える場合には、自分一人のこの身勝手なですね、その行動が、みんなに悪影響を与えるような環境破壊というね、まあ、そういう状態に結び付いていくということも、現実的なこれはもう問題になってますので、そういう意味では、環境問題というのは、やっぱりこの全体への視野というものを持ちながら生きるような生き方を、われわれに要求してるというふうにですね、言わなければなりません。**

**まあ、そういう意味で、人間の大きさというものをですね、精神的な観点からつくっていこうと思ったら、まずは全体への問いを持つ。そして、全体への視野を常に失っていないかどうかということをね、自分で自分に問うてみる。常に全体への視野を持ちながら、この生きる。部分に拘泥して、部分にこだわって、全体のことを考えないような状態になってしまうと、全体のバランスが崩れてですね、まあ、秩序が崩壊するというね、まあ、そういうことになってきますので、常に全体への視野というものを自分の中にこう持ちながら、自分が全体の秩序を崩壊させないように、バランスを崩さないように、まあ、そういう心遣いをしながらね、この仕事をしてる、生きてる。これは非常に血の通った温かな心、人間らしい心、豊かな心、そういうものをですね、つくってくれることになってきます。**

**ところが、この全体というものはですね、学問的に考えると、全体というものは、時間的全体性と空間的全体性という、この全体というものは、世界というのは、時間、空間という、まあ、そういう構造を持ってですね、存在しておりますので、本当にこの学問的にですね、人格の大きさをつくるということを考える場合には、この全体といっても、ただ全体だけでは漠然としておりますので、それをさらに分析していってですね、全体というものには空間的全体性というものと、時間的全体性というものがある。そういうふうに考えていくとですね、だんだん、だんだん、人格の大きさをつくろうと思ったならば、具体的にどういうことを考えたらよいのか。どういう努力をしたらよいのか。そのことが、だんだん、だんだん、こう紐とかれるようにね、なって出てくるわけであります。そこで、まずですね、この全体というものの中でも、空間的全体性とはなんなのか。空間的全体性という観点から、人間の大きさをつくっていこうと思ったら、どういう努力が要求されるのかということからですね、まあ、考えていきたいと思います。**

**で、まあ、空間的全体性というのは、まあ、そこのレジュメに書いてあるように、どれだけの大きさの世界と関わっているかという、この課題と、それから、この対存在の原理。あらゆるものは一対という、対を成して存在しておる。まあ、そういう対存在の原理というものに対する理解がですね、要求されてくるんですね。まずは、この空間的全体性の第１番目は、どれだけの大きさの世界というものを意識しながら、その人が生きておるか。また現実に自分の肉体をこの使った行動というものが、どれくらいの大きさの世界と関わっておるのかですね、そのことを考えていかなければならないと。今、自分が実際問題、仕事上ですね、この関わっておる空間の広さですね。まあ、アサヒグローバルからするならば、自分の仕事の分野が三重県だけなのか。あるいはこの中部地方全体なのか。あるいは東海地方全体なのか。自分がどの範囲でですね、この実際問題、行動し、動いておるのか。そういうこう自分が今、現実的に関わっておるこの世界の大きさが、その人のこの現実の大きさというものをですね、意味するわけですね。**

**だから、その三重県だけで仕事をしておるよりもですね、この中部地方全体をエリアとして仕事をしてるという段階に入ると、もっと人間は大きくなりますし、日本全体という、日本全体を飛び回ってるっちゅうことになってくると、またそれだけの大きさがですね、この自然に肉体的行動というものの範囲が広がってくることによって、自然にその人のですね、この意識の世界が大きくなってきますから、そして、肉体を動かしますので、それが自分の実力というかですね、この自分の人間の大きさというものを、現実の自分の人間の大きさというものを示すっちゅうことになってきます。で、現実の自分の行動範囲がどの範囲なのかということだけではなくって、今度はどれほどの大きさの世界というものを意識しながら、その人が生きておるかですね、そういうこの自分がこのまったく宇宙なんていうようなことは全然考えてないとか、世界なんていうようなことは考えてない。せいぜい、この日本のことしか考えてないというね、そういうこのことになってくるとですね、そこにまたその人が大きくなれる可能性の違いというのが出てくるわけですね。**

**自分の肉体を使った行動というものが、例え世界全体に及んでなくってもですね、自分の今の行動は東海地方ぐらいであってもですね、自分がいろんなことを考えたりする場合の、その関心とか、興味の範囲がですね、常にこう世界というものを視野に入れていて、いろんな社会におけるさまざまなですね、この事件とか、政治や経済の動きというものを自分自身が情報としてつかみながらですね、現実の仕事をしてるという、そういう状態になってくればですね、意識的な面から考えると、自分がこれから成長する大きさの可能性というものがですね、まあ、そういうこの意識の点で、どの程度のこの大きさがある世界を意識しながら生きてるかによってですね、自分の成長する可能性が決まってくると。今の自分の大きさというのは、自分の行動の範囲なんですね。だけども、自分の大きさの可能性というのは、自分の意識がどの程度の大きさの世界をこの意識しながら生きてるか。そのことによって、自分がどの程度の大きさの人間に可能性としてなれるのかということが決まってくるということにもなってくるわけですね。で、これが、まあ、どれだけの大きさの世界と関わって生きてるか。どれくらいの大きさの世界を意識しながら生きているか。今、自分がどれくらいの大きさの世界をこの行動のテリトリーとしておるか。まあ、そういうことがですね、この人間の大きさというものをつくるですね、原理として考えることができます。**

**で、実際問題、まあ、行動はですね、このアサヒグローバルの仕事で東海地方全体を飛び回っておってもですね、実際問題、その中でどれだけのこの結果を出すか、業績を上げるかによってもですね、またその人の現実の大きさは違ってくるので、飛び回っておってもなかなか成果が出ない。営業成績が上がらんっちゅうことになってくるとですね、その結果を出さないと大きさにはなりませんのでね、大きさの実力になりませんので、飛び回っておっても、なかなか結果が出ないというようじゃ、これはこの結果が出るだけの大きさしかないというふうにね、言わなきゃならないので、その点はこう実力ということを考えるうえで、大きさというものがどの程度の実力を持っておるかということに行動した結果、どの程度の成果が出てるかということに、まあ、実力というのは関係してきますからね。まあ、そういうふうに考えなければならない。そういうふうなことをですね、考えながらね、その自分の人間としての大きさというものが、どういうふうなこの意識の成長によってできてくるのかということをね、考えてみてもらいたいと思います。**

**まずは、どの程度の大きさの世界と自分が関わっておるのか。現実に自分が動いてる範囲がどの程度なのか。それが自分の現実のこの大きさというものを決める範囲だと。だけども、その中でどれだけの結果が出ておるかということによって、その人の大きさの実力がどの程度できておるかということが、まあ、決まってくるっちゅうことですね。それと、この意識においてどの程度の大きさの世界を意識しておるかということが、その人の大きさの可能性、どこまで大きくなれるかということはですね、その意識の面において意識されておる、この世界の大きさというものによって決まる。だから、自分が意識しておる、この世界以上の人間には、絶対になれないんですよね。自分が意識しておる世界の大きさというものが自分の成長の限界なんですね。だからこそ、より大きな世界を意識できる自分というものを、まあ、つくっていくということがですね、自分の可能性を大きくする、広げるということになってくると。そういうことをですね、まず考えてみてもらいたいと思います。**

**それから、第２番目は、対存在の原理。これはどういうことなのかといったらですね、この現実のこの社会の中でですね、いろいろこの行動しておって、で、その中で、まあ、いろいろ人間はあれこれと判断するんですけども、この俺はこう思うというふうにですね、何かしら意見を言ったらですね、必ずこの、いや、そうじゃないじゃないか。こうじゃないかっちゅって、真っ向から対立し、反対してくるですね、人間がこのいるんだ。またいなければならないんだ。それが現実なんだということを知っているということがですね、この人間の大きさをつくる大事なこの意識だということですね。で、自分はこうだと思ったら、みんながそれを認めな、気に入らん、気に食わんというふうなことではちっぽけな人間なのでですね、自分はこうだと言ったら、いや、そうじゃないじゃないかと言う人間がおっても構わない。必ずそういう人間はおるんだと。そういうふうなですね、この現実認識を持つと人間は大きくなれるわけですよ。自分と違う考え方の人間がおることがむかつくとかですね、自分と違う考え方の人間とはうまくやっていけないということはちっぽけな人間なので、自分が大きさのある人間になろうと思ったら、俺はこうだと言ったら、必ず、いや、そうじゃないじゃないか。こうじゃないかと言って、真っ向からですね、180度、この違うところからね、反論をしてくるという人間が必ずこの現実にはおるんだということを知っておると、そういう人間が出てきてもびくつかない、動揺しない。それは当然だろうという、そういう判断ができてですね、なんとなくこう大きさを感じさせるような態度、生き方というものが出てくるわけであります。**

**だけど、この自分がこうだと考えたらですね、みんなもそういうふうに考えなきゃならんとかですね、自分の考えというものを受け入れない人間がいるということに対して、自分がこう許せない。どうしても自分の考えを認めさせようというふうな、まあ、そういうこの自分の考えが一番正しいんだというふうにこう思ってしまうと、ちっぽけな人間になるわけですね。これは、まあ、これから個性の時代というふうにですね、いわれますけども、個性の時代というのはどういう時代なのかといったら、みんな考え方も違ってもいい、みんな感じ方も違ってもいい、みんな判断も違ってもいい、みんな宗教も違ってもいい、文化も違ってもいい、性格も違ってもいい。それが、まあ、個性の時代というもののですね、あり方であります。そういう個性の時代の中で、みんな仲よく生きていこうと思ったら、必然的に考え方の違う人と仲よく生きる。価値観の違う人と仲よく生きる。性格の違う人と仲よくやっていける。宗教の違う人ともけんかしたり、戦争をしないで仲よくやっていける。民族が違っても仲よくやっていける。そういうこの生き方が個性の時代には要求されるわけですよね。だから、個性の時代というものをですね、この生き抜く力というものをつくっていこうと思ったら、必然的にこの人間の大きさというものがね、要求されてくるわけであります。**

**これからは、人間の大きさ、人格の大きさ、そういうものをですね、求めていかないと、自分自身が現実社会を生きにくくなってくる、生きづらくなってくる。生きづらいということは、自分が不幸になるわけですよね。自分が本当に幸せなですね、この楽しい人生を生きていこうと思ったら、個性の時代というこのことを考えると、考え方の違う人とも仲よくやっていける。性格の違う人とも仲よくやっていける。まあ、そういう自分をつくっていかないかんな。そうやないと、自分はこの幸せにならんなっちゅうことが、まあ、わかるわけですよね。だけど、残念ながら、今日、そういうことができる人が非常に少ない。だから、みんな、ほとんどがですね、離婚の危機に直面しておったりですね、あるいは、この恋愛をしておっても、ちょっとしたこの気分の違いでですね、もうこの別れてしまうとかですね、そういうふうな状態になってしまっておって、ほとんどの人が自分と同じように考えてくれる人としか一緒にやっていけない。価値観が違ったら、一緒に仕事なんかできるはずはないやないか。感じ方が違ったら、一緒に生活なんかできないとかね。まあ、そういう状態にこうなってしまっておる。**

**で、非常にそういう意味ではですね、みんな自己中というかね、みんな自分中心というか、本当にこの人を愛するということができなくなってしまってですね、相手が自分と同じように考えてくれないと、その人が好きになれんっちゅうことは、その人は実は自分しか愛せない人間なんですよね。同じ考え方の人としか一緒にやっていけないっちゅうことは、自分しか愛せない人間なんだ。自分しか愛せないような愛は偽物の愛やと。自分しか愛せないような愛でどうして子孫が残せようか。本来、愛というものは、男が女を愛し、女が男を愛する。まあ、そういう他者を愛するというところにね、愛の基本的な原理があるのであって、自分しか愛せないような人間がどうして子孫が残せようか。自分しか愛せないような愛は、本当にこれは自己中で、わがままで、身勝手な愛に過ぎない。本当に人を愛するというね、まあ、そういう力がない。そういうふうにこう言わなきゃならん。**

**そういう愛をですね、成就するためにもですね、愛をこの貫いて、一生その人と愛し合って生きていくという、そういうふうなですね、この人生を考えるうえでも、やっぱりわれわれは人間の大きさ、自分と違う考え方をも認めて許す。自分と違う考え方の人から何かを学んで、その人を知って、そして、その人とどう生きていったらよいのかを考える。違いを嫌だと思わないと。自分にないものを持ってる人から何かを学んで自分を成長させる。相手から学ぶことによって、相手のことを理解してあげる。そして、共に生きていく力をつくっていく。まあ、そういう大きさがですね、この愛を育てるためにもですね、要求されてくるわけですね。そういう意味では、この人間の大きさをつくるということはですね、非常にその、まあ、現実的な大きな課題だし、また自分自身が幸せになれるか、不幸になるかのですね、大きなこの問題を秘めておる、関わっておる。まあ、そういうふうにですね、言わなければなりません。**

**で、この対存在の原理というのは、このいろいろに考えることができるわけなんですけども、とにかく自分がこう考えると言ったらね、必ず、いや、そうじゃないと。俺はこう思うと言って、真っ向から反対を唱える人が必ずおるんだということをですね、知ってるということが、この社会を生きるためには大事なんですね。これはなんでかといったらですね、人間は皆、不完全ですから、自分と違う考え方というものは、自分の考え方が持っておる欠落した部分、自分の考え方が、この忘れておる部分、自分の考え方の欠点、短所、行き届かないところというものを補ってくれるために、自分と違う考え方が必然的に出てきてしまうというのがですね、この世界というか、この現象世界のね、基本的な構造なんですね。いろんなものがある。それはいったいなんでなのか。それはお互いに補い合うだけだと。一つでは完全じゃない。一人では完全じゃない。だから、その一人の人間の不完全な部分を補うためにですね、その人と違う考え方や感じ方やいろんなものが出てくるんだ。だから、あらゆるものは、その意味で、あらゆるものは、相互補完的な関係において成り立っておるというふうにこう言わなければならないんですね。で、そういうこの状況を人間の関係からいったら、パートナーシップというふうにね、言ったり、ベターハーフというふうな言い方をしたりするんですけど、この宇宙の基本原理からいうと、それは対存在といってですね、相互補完的関係というふうに、まあ、言うわけなんですよ。**

**で、なんでこの対存在ということがですね、非常に人間にとって大事なこの問題なのかということなんですけど、人間もこれはこの、人間もこの現実の宇宙の中に存在する一個の命であって、われわれ一人一人が宇宙なんですよね。自分自身も宇宙を構成しておる一個の存在であり、一個の命です。よく人間は小宇宙だといってですね、本当の宇宙は外にあるんやというような、そういう感じで、大宇宙と小宇宙というような、そういうふうなことをおっしゃる方もいらっしゃるんだけど、実はそういう関係じゃなくって、われわれ自身が、今、存在するこの大宇宙の一部分を自分自身が占めてるんだ。自分自身が宇宙の一部分なんだ。われわれも宇宙なんだというのがですね、この現実的な事実としての理解の仕方であります。われわれも宇宙なんだ。じゃあ、宇宙とはいったいなんなのかといったらですね、宇宙というのは、このマイナスに評価されるエネルギーとプラスに評価されるエネルギーが、エネルギーバランスを模索しながら、宇宙の秩序をつくってるというのが宇宙の摂理といわれる、まあ、そういうこの法則なんですよね。宇宙というのは、マイナス、プラスがお互いにこの協力し合いながら、バランスを取り合いながら、宇宙の秩序が崩れないようにですね、この働いてるということを宇宙の摂理という。これは、まあ、高等学校の教科書、高等学校の物理の教科書ではですね、宇宙とはエネルギーバランスだという、そういう書き方がしてあります。それが宇宙の姿。**

**で、宇宙というのは、そういうこのプラスのエネルギーとマイナスのエネルギーがお互いにこの相互補完的な関係で協力しながらですね、この宇宙の秩序をつくっておって、その摂理の力、その力によって、宇宙の中に存在する、あらゆるものをつくり出すというね、まあ、そういう働きをしてます。そういう意味で、宇宙というのは、この宇宙の中に存在するあらゆるものをつくり出した、まあ、そういう本体なんですよね。だから、宇宙の中に存在するものは、みんなですね、そのマイナス、プラスのバランスを取るという、そういうエネルギーでつくり出されたもんですから、宇宙の中に存在するあらゆるものは、このバランスを取る、調和を取る、そういう平衡作用というかね、そのバランスを取る働きというものが宇宙の中に存在するものの、あらゆるものの基本原理です。なんで星は丸いのか。なんで星は丸くなるのか。なんで星は丸くなるのかというと、あれは３次元というね、この立体的な３次元という空間において、完全なバランスを追求すると球になる、ボールになるわけです。ボールというのは、中心点からすべての面が等距離にあるというね、まあ、そういうのが、まあ、ボールなんですけど、それが完全なバランスの姿なんですね。３次元の中でバランスを追求すると球体になるわけですね。だから、星はこの丸くなる。宇宙そのものがバランスというものを保つ、バランスをつくるということを基本原理にして存在してますから、その基本原理によってすべてのものはつくられますので、すべてのものは丸くなろうとする。すべてのものはバランスを取ろうとする。まあ、そういう働きが基本にあるわけですね。**

**だから、人間の肉体もだいたい左右シンメトリーに近いバランスの構造で成り立っております。神経系の中でも、交感神経、副交感神経で成り立って、命の機能を保っておりますし、栄養を取る場合でも、空腹、満腹というバランスでですね、栄養を取るというね。あらゆる命の働きは、そういうバランス作用、平衡作用、調和作用というかたちで成り立っておるわけですね。だけど、調和を取ろうと思ったらですね、必ずこの相対立する原理が必要である。プラスとマイナスとかですね、陰と陽とかね、そういう相対立する原理がこのないと、バランスが取れない。だけども、相対立する原理は対立しない。協力し合うんだ。そのことを相互補完、相互補完的関係、お互いに補完ということは補い合うね、補い合って完全になるという、そういう関係性ですべてのものは存在してるのが宇宙なんだっちゅうことですね。これは相互補完的関係というんですね。マイナス、プラスが対立をしないで、対立的な原理なんだけど、対立をしないで協力し合ってる。助け合ってる。それを相互補完的関係というんですね。まあ、だから、宇宙の中に存在するのは、全部、一対、対というね、一対という、そういう対という、そういうこのあり方ですべてのものは存在してる。だから、プラスにはマイナスがあるし、陰には陽があるし、光には影があるしね、表には裏があるし、善には悪、美には醜、真には偽ね、清には濁ね、男には女、動物には植物ね、上には下、右には左、前には後ろね。全部、半分ずつになってるわけですよ。それがお互いにバランスを取るというかたちで、あらゆるものは正常なあり方ができるという、そういうことになってるわけですね。**

**そういうことを対存在というんですよね、対存在。あらゆるものは一対というかたちで存在してるのであって、一対の片方がなくなってしまったら、片方もなくなってしまって、全部なくなってしまうと。で、よく、まあ、理性で考えればね、善はいいけど、悪はいかん。悪はなくさんないかんというんですけどね、だけど、宇宙は対で成り立ってますからね、善も悪も両方とも半分あってなくならないんですよ。よく、その表はいいけど、裏はいかんといってですね、その表だけじゃないといかんみたいなことを申しますけど、そんなことを言うとったんじゃ、紙なんかはどうありゃいいんだって、困りますからね。表のある分だけ、裏がないと紙にはならんね。裏のない紙なんちゅうのはないんですからね。必ずそういうですね、両面がある。あらゆるものは、そういう対というね、構造で成り立っておるんだ。それがこのあらゆるものの存在の基本的な原理なんだ。だから、このすべて対なんだから、俺はこうだっちゅったらですね、いや、そうじゃないじゃないかというやつがあって対なんだと。どういう対なのかといったら、自分の考えの欠点や、自分の考えにおいて欠落した部分を補うためにですね、自分と違う考え方が出てきてくれて、そして、それと協力したら、初めて完全になるというね、まあ、そういうふうな構造で宇宙は成り立っておるんだっちゅうことですね。**

**だから、自分と違った考え方の人が出てきてもむかついたらいかんと。ああ、これは俺の考えの足らんところ、自分の考えの気が付いてないところをですね、この教えてくれるために、補ってくれるために自分と違う考え方ができて、出てきてくれてるんやな。ありがたいことやな。これは相手と協力してやっていかないかんねやな。助け合ってやっていかないかんのやな。そういう気持ちに本当はならんないかんっちゅうことですよね。だけども、残念ながら、この理性的なね、理性的な人というのは、このそういうふうに考えられなくってですね、真理は一つだと。だから、自分と違う考え方が出てきたら、どっちの考え方が正しいか、決着を付けよう。そういうことになってきてですね、勝つか負けるかのけんかになり、戦争になるわけですよね。これが理性で生きる人間の小ささ、理性で生きるが故にですね、対立をつくってしまうという、まあ、そういうことになるわけですね。**

**理性で考えたらね、善はいいけど、悪はいかんのですよ。もちろん、悪はいかんのだ。だけど、悪はなくならないんだ。それがこの真実の世界なんだ。真理で考えたらね、真理で考えたら、善はいいけど、悪はいかんしね、表はいいけど、裏はいかんのだ。うそは言うたらいかんのや。だけども、うそは言わない、うそを言わないで生きてる人間はいないんだ。いろんなことを考えて、こんなこと言うたらかわいそうやなと思って本当のことを言わんとですね、その相手が気持ちの休まるようなことを言ってあげたりね、よくおべんちゃらを言うとか、褒めるとかですね、そういうこともみんな、うそなんですから、本当はね。だけども、そういうことを言うことによって、人間関係はよくなるというね、相手を思うが故に、この本当のことを言わないで、まあ、実際よりもよく褒めるとかね、そういうちょっとしたうそというのは、みんなこうあって初めて人間関係は成り立つのであって、まあ、そういうこの本当のことばっかり言うとったんじゃですね、生きていけないという、そういう現実があります。だけど、それは全部、愛故にね、愛故に、人間関係を考えるが故に、この心温かな心情があって言うことなんですけども、だけども、この人生を考えれば、半分はうそで、半分は本当のことという、まあ、そういうふうなですね、感じにこうなっております。だからといって、うそを言うたらいいわけじゃない。うそを言うたらいかんのですけどね、うそを言うたらいかんのですけど、この本当のことばっかり言うとったんじゃ、うまくいかんということになってるのが、人生、人間の社会なんですよね。そこに心遣いをせんないかんという、そういうことも出てくるわけであります。**

**まあ、とにかくこのあらゆるものは一対というね、そういう構造において成り立ってますので、この自分の考えと違う考え方の人間がおって当然、いなきゃならない。まあ、そういうね、この腹をつくっていかないといけないということですね。自分と違う考え方の人間は許せないというふうに思ったらいかん。自分と違う考え方にむかついたらいかん。違うということを受け入れていくことが大きな人間なんだと。まあ、よく度量の大きな人間と言いますけど、度量が大きいっちゅうことは、自分の考えと違う考えの人を認めて許す。なんて度量が大きいんだという、そういうふうに、まあ、言われる訳なんですよね。そういうことがなんでできるのか。それは、自分と違う考え方の人というのは、俺の考え方の欠落した部分を補うために出てきてくれてるんだと。相手と一緒になって、初めて完全なんだ。相手の持ってるものの中で、自分にないものを相手から学んで俺は成長できるんだ。そういうふうに考えるからですね、度量というものができてくるわけであります。そういうふうにして度量のある、大きさのある人間に人間は成長できるわけなのでですね、自分と違う考え方のやつは憎たらしい。そういうむかつくっちゅうことをやっていったら、これはもうちっぽけな人間で終わってしまうわけですね。**

**まあ、まずとにかく原理的にいって、あらゆるものは、この一対というね、対というかたちで存在しておって、そして、そのあらゆるものは、そういう相互補完的関係、互いに補い合うというね、そういう関係にあるんだということをね、まず知らなければならない。だから、相手の短所を見つけ出したら、責めたらいかん。相手の短所を発見したら、助けてあげないかんと。補い合わなきゃならんですからね。自分の短所はそこに優れた能力を持ってる人に助けてもらってですね、ありがとうと言わんないかんと。宇宙というのは、プラスとマイナスが両方あるんですけども、どちらがいいとか、悪いとか、そういうふうなことになってなくって、両方とも必要なんですよね。両方とも必要なんですよ。人間には長所も短所もありますけどね、理性で考えたら、長所はいいけど、短所はいかんのですけど、だけど、両方とも必要なんですよ、人間には。長所も短所も。なんでかといったら、短所がなかったら、人間らしい謙虚な心はできない。短所がなくなってしまったら、人間じゃなくなってしまうんだ。短所があるからね、俺にはこういう短所があるということを自分が知るとですね、すると、謙虚なこの心がこうできてくるわけですね。そういうことで、この、まあ、人間らしい人間になるためには謙虚な心が必要だということが、まあ、言われるわけであります。**

**短所がなくなったら人間じゃないんですね。長所ばっかじゃ、もう傲慢になるっきゃないと。短所が半分あるのでね、傲慢にならないで、みんなと共に生きる力、違う考え方の人も共に生きる力というのが、こう出てくる、つくられるのであって、長所ばっかじゃ、傲慢になるしかない。短所が半分あるからですね、人間は謙虚な気持ちでですね、自分の考えにも欠点はあるわなということでですね、この謙虚になって、相手の考え方から何かを学ぼうというような、そういうこの気持ちになってくると。相手から学ぼうとすることは愛だ。相手から学ばないということは愛がないんだ。愛するとは学ぶことだ。これもやっぱり、愛というものを考えるうえで、非常に大事なですね、この原理なんですけども、この自分にないものを相手から学ぼうとすることによって、人間は大きくなれる。だから、愛せるんですよね。愛するということは、やっぱり広い大きな心がないと、本当には人は愛せません。**

**とにかく、この人間には長所も短所もあるんだけど、長所がいい、短所は悪いというふうに考えたらいかんと。宇宙はプラスもマイナスも共に生かしてですね、存在してるんだから、われわれも長所も短所も生かさなければならない。善も悪も生かさなければならない。美も醜も生かさなければならない。あらゆるこの相対立するものをですね、生かしていかないと、人間的な血の通った温かな心を持って生きてはいけないということですね。そういう意味で、このわれわれは人間、すべての人の長所も短所もちゃんとこの認めて、そして、それとどう付き合ったらいいのか。そして、短所を生かす力というものをつくっていく。まあ、そういう努力もね、人間の大きさというものをつくっていくためには大事な問題なんですよね。で、とにかく短所がなくなったら人間ではないと。短所があって初めて人間なんだと。だから、短所はなくす努力はしたらいかんし、短所をなくさせる努力はさせたらいかん。だけども、短所はあっていいんやって、開き直ってしまったら、これは人間ではない。まだ動物の段階だ。人間というのは、自分にはどういう短所があるのか、自分にはどういう長所があるのか知って、それを知って初めて人間になれる。なぜならば、自分の短所はどういうところにあるのかっちゅうことを知ることによって、謙虚な、人間らしい心ができますからね。人間の本質は心といわれますけど、人間らしい謙虚な心というのは短所の自覚から生まれてくる。だから、短所はあっていいんやと開き直ってしまって、その知ったことかとやっておったんじゃ、これは人間ではないと。俺にはどういう短所があるのかっちゅうことを知ってなかったら、人間ではない。で、知ることによって、この人間らしい謙虚な心ができてくる。そのことによって、この控えめは、慎ましいですね、まあ、そういうこの言動というか、生き方ができてくることになってくる。また自分の長所もちゃんと知って、そして自分の長所を伸ばしてですね、他人の役に立つ人間になろうとするのもですね、この人間の大きさ、また愛の力だと。長所を、自分の長所を伸ばすのは愛なんですよね。自分のために自分の長所を伸ばしたってしょうがないので、人の役に立つために長所を伸ばして、初めてわれわれは社会の中で金をもらって生きていくことができると。長所を伸ばすのも人のためだ。人の役に立つためだと。自分一人で生きてる分には長所も短所も関係ないんですよね。他人とともに生きるから、長所、短所ということが関係してきてですね、他人に嫌な思いをさせるのは短所で、他人にいい思いをさせるのは長所だというね、まあ、そういうこの他人との関係でそういうものが出てきますからね。だから、この自分の短所は、短所がなくなったら人間じゃないんだから、短所をなくす努力はしたらいかんけども、自分の短所がどこにあるのかを知ってないと人間ではない。知らなかったら人間以前の動物だと。短所を知って初めて人間になれる。だけど、短所が出てきたら、この嫌われるからですね、短所はあまり出てこないように注意をせんないかん。それも愛だ。それも人間の大きさなんです。短所は出てこないように注意をする。それも心を育てるね、方法である。**

**そして、またこの人の短所を発見したら、責めたらいかん。短所はなくならないんだから、助けてあげんないかん。人の短所、助けるために俺は長所があるんだと。自分の長所で人の短所を助けようと思わないかん。短所はなくならないんだから、責めたらいかん。助けてあげる。それがパートナーシップであり、相互補完的な関係というものをですね、意識して生きるということなんですよね。宇宙はそういうふうにして、あらゆるものが責め合わないで助け合ってるわけですよね。宇宙の中に存在するものは、お互いに短所を責め合っとったんじゃ、もううるさくって、やかましくってしょうがない。お互いに助け合ってるから、静かにですね、このお互いに納得できるような関係性で、まあ、秩序が保たれてるので、お互いに駄目なとこを責め合っとったら、もううるさくってですね、やかましいということになってきますからね。まあ、とにかくそういうことで、この自分の長所というのは、人の短所を助けるためにあるのであって、人の短所を発見したら、責めたらいかん。助けてあげようと思うのが人間らしい、血の通った、温かな心だ。**

**また自分の短所は知っておってですね、それをまた短所をさらけ出してね、俺の駄目なところはここなんやと言ってですね、そして、みんな助けてくれよっちゅって助けてもらって、助けてもらったら、ありがとうっちゅって感謝して、君はすごい力を持ってるね。素晴らしいねっちゅって、相手を褒めたたえるね。そして、その相手に感謝をする。相手を尊敬する。恩を感じる。これがこの血の通った人間的な温かな心をつくっていく、この方法論なんですよね。短所がなかったら、この美しい心はつくれない。感謝するとか、恩を感じるとか、尊敬するとか、相手を褒めたたえるとか、まあ、そういう美しい心は、短所があって初めてつくれるんだ。自分の短所は恥ずかしがらないでね、堂々とさらけ出して、助けてくださいと言って助けてもらったら、かわいいんですよ。愛されるんだ、かえってね。短所を隠すからね、なんかこう、嫌なやつやなってなってきて、なんかこう憎たらしいとかね。なんかつんつんしてるとか、周りにいろんなことを言われて、かえって非難される。短所をさらけ出したらかわいい。助けてくださいと言ったらかわいい。助けてもらったら、ありがとうございますと言ったらかわいいですからね。いい人間関係がつくれます。短所を隠すから、うまくいかんのですよ。**

**まあ、企業なんかでも、この問題を隠したりね、駄目なところを隠して発表しないからね、企業は駄目になってつつかれるのでですね、駄目なところ、問題をさらけ出して、で、そのこういうところに問題がありますので、そこのところ、これからちゃんと修正していって、しっかりやっていきたいと思いますと言ったら、国民はそれを認めて褒めるんですけどね。それを隠して、暴かれるまで隠しておくことをするから、非難されるわけですよね。どんなことにもマイナス面、どんなことにも問題、完璧っちゅうことはないんですからね。常に問題がある。だけど、常にこう理性で考えると、常に完璧やないといかん。完璧やないといかんと思うのでね、ついつい完璧やないといかん。だから、問題点を隠す。失敗を隠す。そういうふうなですね、この気持ちになってきてしまってね、そのことによって、企業は犯罪の温床と化するというね、まあ、そういう状況になるわけです。問題はあって当然、欠点はあって当然。失敗しても、それは人間なんだからしょうがない。失敗を認めてですね、そして、失敗したら、その失敗を責めないでですね、人間なんだから失敗するのは当然やと。失敗しても責めないで、今度はどうしたらいいと思う？といって、失敗をしながら、失敗を繰り返しながら、最後にこのうまくいくという状態になるまでね、やめさせない。失敗しても、成功するまでやめさせない。それが人を育てるという教育の方法であります。失敗したら、おまえ、失敗したんやから、もう駄目やっちゅってですね、やめさせて、で、そのうまくいく人間にさせるとか、まあ、そういうことをしておったら、人は育たないですね。失敗しても、失敗しながら、今度はどうしたらいいかな、今度はどうしたらいいかなっちゅうんでですね、この考えながら、うまくいくまで、成功するまで頑張らせて、やめさせないでということをするから、人は育って、実力というのができていくんですね。**

**そういう意味で、常にですね、この問題点はある。常に欠点はある。誰にも短所がある。それは当然なんだ。問題がないということは、これは異常なことであって、問題があるということは正常なことだと。人間も不完全だ。現実も不完全だ。問題のない現実はない。だから、問題があることは当然なんだから、問題は堂々と発表したらいいと。だけど、学校なんかでも、わが校には問題はありませんと言わないと、父兄はその学校に子どもをやらないからね、だから、どんな問題があっても、校長先生や先生は問題を隠すんですよ。発表したら、学生が来ませんからね。わが校はこんなに素晴らしいですね、問題のない、素晴らしい学校ですというんでですね、まあ、そういう素晴らしい学校やったら、子どもをやろうかっちゅうことになってきますからね。これが、この理性的なですね、ゆがんだこの意識に基づくね、この学校のあり方をつくってしまうんですね。常に問題はある。どういう問題があるのかということを堂々と発表できるですね、まあ、そういうこの学校にしなきゃならんし、会社にせんないかん。問題を発見したら、みんなで、じゃあ、それをどういうふうに補っていこうか。どういうふうに乗り越えていこうかというように考えていったら、みんな助け合うというね、そういうこの意識を持った会社になっていくんですね。**

**そういうこの常に問題はある。問題のない現実はない。常に問題はあっていいんだというふうに考えると、大きさのある人間になれるんですよ。だけど、問題を、問題のない状態にせんないかん。問題があったらいかん。悩みがあったらいかん。問題と悩みがないことが幸せなんだ。会社にも問題があったらいかん。学校にも問題があったらいかん。そうなってしまうとですね、その問題を隠してね、そして、そのそういう隠すということになってくるからね、だんだん、だんだん、人間がちっぽけになっていってですね、醜くなっていってしまうんですね。まあ、常にそういうね、あらゆるものは一対という構造で成り立っておるんだということをね、ちゃんと意識しながら生きるということが、この人間として大きくなっていく重要な精神的原理なんですね。どんな人間でも、みんな長所、短所、半分ずつあるんだ。そして、短所は助けてあげなければならない。人の短所を助けてあげるために俺の長所を伸ばしておくんだと。助けてあげられるために自分の長所を伸ばすんだ。自分の短所はさらけ出して、助けてもらうんだ。助けてもらうのはね、大きさのある人間しかできないんですよ。短所をさらけ出す勇気というのは、大きさをつくるんですよ。**

**どんな人と付き合う場合でもね、人間はみんな長所半分、短所半分なんだから、どんな人と付き合っても必ずその人の中には、自分にとって嫌だなと思うところが半分はあるんだ。短所の半分ない人間はいないんだ。どんな人にもいいところも半分あるけど、どんな人にも駄目なところも半分あるんだ。それが人間の避け難い宿命なんだ。そのことをちゃんと認めて許すことができたらね、人間は大きくなります。人の短所を責めないで、助けてあげる。どんな人にでも、駄目なところは半分あるんだ。それはなくならないんだから、許してあげなければならない。人の短所を許して、助けてあげる。それが大きさのある人間の心であります。そして、その助けてあげようと思ったら、自分の長所を伸ばす努力をしなければならない。で、長所で人を助けてあげようと思ったら、長所というのは、さすがですねと言われるところまでですね、伸ばしておかないと、人を助けてあげるというね、そういうこの、まあ、実力はできない。**

**で、まあ、現実にですね、その自分の考えをこの発表した場合にですね、いや、そうじゃない。俺はこう思うって、また真っ向から反対してくる人間もおるけど、90度、横やりを入れてくるというね、90度の角度から横やりを入れてくるような、そういう考えもね、あったりなんかしましてですね、とにかくは、現実というのは、どんなことでもね、360度の視点からものを眺めることができるわけですよね。で、人間というのは、自分の今、肉体のある場所からしかものは見えないし、今、自分の肉体のあるところでしか判断できないし、今、自分の肉体のあるところでしか感じられないんですよね。だから、どんな立派な人間でも肉体がある限りはね、自分の立場からしかものが見えないという、まあ、そういうこの限界というか、有限なね、まあ、そういうところがあります。だから、誰でもみんなですね、偏見というかね、まあ、そういうこの偏った考え方を持っておるんですよ。だから、どんな立派な人の考えにもね、みんな問題点はあります。だから、今、私がお話をしておるこの考え方というのは、感性というものを原理にしたら、こういうふうに考えることができるという考え方をお話をしておるんですけども、ということは、理性という観点から考えたら、違ったことが言えるということになってきますよね。**

**だから、どんなことにもね、そういう問題点、欠落した部分というのはあるんですよ。だから、いろんな考え方がですね、この絡み合って、初めてですね、その全体的に落ち度のないような、まあ、そういうこの考え方にこう成長させていくことができる。だから、批判されたら、その人から学ぶというね、そういう気持ちをですね、つくっていかないと、この大きさのある人間にはなれません。で、そういうことがちゃんとわかってくると、どんな人が出てきても、どんなことを言われても、びくつかないというね、むかつかないというふうな、そういう状態になって、その状態を、まあ、昔から不動心というんですね。動じないというね。動じないというのは、全然その動かないというんじゃなくって、少々はこう、少々はむかついたりですね、嫌なやつやなと思ってもですね、すぐに、ああ、これはあの人から何か自分は学ばないかんのやなと思うことによって、自分が大崩れしないで、また元の平常な状態に自分が戻れるというね、そういう状態を平常心、不動心というふうにいうんですよね。で、その不動心とか、平常心というものを持つことができる、そういう大きさのある人間でないとですね、何かこう人からなんか、自分を批判されるとですね、むかついてしまって、そして、その心が乱れて、この、まあ、付和雷同というかですね、この自分を見失って、感情的になってしまって、この乱れた行動を取ってしまうという、まあ、そういうのが、まあ、ちっぽけな人間のこのあり方ですよね。**

**やっぱり非難されると、感情的にこうむかついてしまってですね、そして、その、まあ、ひどい場合には殺したろうかと思ったりなんかしてですね、まあ、そういうのは、やはり自分を見失う。自分が外からの力によって動揺させられて、自分が壊されてるという状態なんですね。これはもうちっぽけなですね、この、まあ、人間としてできていないね、そういうこの状態であります。それの反対に、この自分が批判されてもですね、そのことによって感情的になって、むかついて、そして、その、まあ、相手にこう対立的にこう出ていってしまうという、そういう状態にならないでですね、その外からいろんなことを言われてもですね、自分がその動揺しないで、相手の言うたことの中で、何かしら自分が学ぶものがあったらですね、それを自分の中に取り入れて、そして、その批判した人によく言ってくれました。ありがとうございましたとこういう、そういう気持ちになれると、自分がこう動揺しないで、不動心、平常心というものをこう保ちながら、自分を見失わないで相手と付き合っていける。まあ、そういうことになってきて、そして、そういう姿が相手に、なかなかあいつは大きさのある、大きさのある人物やな。なんか大きなやつやな。まあ、そういうことをですね、相手に感じさせるということに、まあ、なってくるわけですね。**

**それを感情的になって、むかついてしまうと、ちっぽけなやつやと。そういうことで批判されてしまうということに、まあ、なってきます。まあ、常にそういうこの一対というね、そういうこの状態で、あらゆるものがですね、そのお互いに補い合うという関係性で、あらゆるものは存在するんだ。そのことをですね、ちゃんとこう意識しながら、われわれはいろんな人と付き合っていくということをしていかなければならない。で、こういうのを、まあ、ちょっと難しく言うと、真理で生きるんじゃなくって、真実を生きるというね、まあ、そういう言い方をする。真理で考えると、善はいいけど、悪はいかんのですけど、真実の世界というのは、善もあり、悪もあるんだ。だから、善も悪も生かさなければならないんだ。なんで悪は存在するのか。それは何が善かを教えるためだ。また、悪とかですね、事故とか犯罪とかといわれるものは、現実の社会のどこに問題があるのかということを教えるために出てくるのであって、悪がなくなれば、社会は停滞する。失敗するから成長するのであって、誰も失敗しなければ成長はないんですね。悪もまたこの社会を発展させる。そのことのためになければならないというね、そういうかたちで存在しておるわけであります。だけど、まあ、理性で考えたらね、悪いことはしたらいかん。もちろん、悪いことはしたらいかん。だけども、悪いことをする人はなくならないんだ。**

**これは、まあ、昔から石川五右衛門先生がね、おっしゃってるようにですね、「浜の真砂は尽きるとも、世に盗人の種は尽きまじ」。浜の真砂というのは、海の砂浜の砂なんですけどね、そういうこの、例えその海の砂浜の砂はなくなることはあったとしても、泥棒、悪いことをする人間はなくなることはない。その海の真砂という、まあ、砂浜の砂というのは、まあ、そんな簡単になくなるもんじゃないんです。それがなくなったとしても、悪いことをする人はなくならんぞというほど、悪いことをする人は永遠にいるということをね、言ってるわけですね。誰も悪いことをしたくってするんじゃないんですけどね、このみんな、おぎゃあと生まれたときには、天真爛漫なですね、清らかな心と瞳を持って生まれてくるんですけど、結果として、この生まれてからのちにいろんな人間関係、いろんな出来事に出合ってですね、そして、その犯罪を犯さなきゃならんようなね、そういう状況に追い詰められていって、人間は犯罪を犯す、悪いことをする。まあ、そういうふうなことにこうなってくるわけですよね。だから、罪を犯すということも、本来からいうならば、その人の責任ではない。それは、この生まれてからのちのその人に関わったいろんな人たちがですね、その人をそういうこの罪を犯さなきゃならんような状況に追い詰めていってしまうというね、まあ、そういうこのことになって、まあ、犯罪者というのはこう出てきてしまうんですよね。まあ、その意味においては、このかわいそうな人というふうにね、言っても、この差し支えないと。もちろん、罪を犯せば、それは償わなければならないんですけどもですね、だけど、罪を犯した人間を責めて、責めて、責めて抜いて、相手が苦しんどるのを見て、ざまあみろと言ってるようじゃ、そこには血の通った温かな心という、この人間らしいものはないんだと。罪を犯した人と接する場合でもですね、その罪を犯した人の悲しさ、苦しさ、つらさがわかってあげて、初めてそこに血の通った温かな心がある人間らしい人間というふうに、こう言うことができる。そういう心情を持つのも大きさのある人間なんですよね。人を責めて、責めて、責め抜いて、ざまあみろと言ってるんじゃ、ちっぽけな人間だと。**

**うそは言うたらいかんのだけど、このうそを言うということが、どんなにつらいことなのかね。うそを言うまでどんなに悩むか、もうそのことをこう考えたならばね、ただうそを言ったっちゅってですね、責めるんじゃなくってですね、その追い詰められて、うそを言わなきゃならんような状況に陥った人の、このつらさや苦しさというものをわかってあげてというね、まあ、そういうふうな、この気持ちを持てば、大きさのある人間になれるわけですよね。そういうのがこう、真実を生きるといってですね、単純にこの善はいいけど、悪はいかんと言わないと。悪というものにも、それなりにですね、この存在の意味があるんだという、まあ、そういうことを考えると、人間は大きくなれます。で、またこの、まあ、そういうですね、そのあらゆるこの対立的な関係性というものは、実は対立じゃなくって、相互補完、助け合わなきゃならんという関係性にあるんだということを知るだけじゃなくってですね、どんなことでも、どんなことでもですね、この現実に存在する、あらゆる職業に生かすことができるというふうな考え方をするのも、まあ、対存在の応用であってですね。**

**例えば、建築学科を出たならばですね、建築会社に就職せんと、自分の能力は生かせないと思ってしまったら、このちっぽけな考え方であってですね、この建築の勉強をした人間にしか書けない小説がある。建築の勉強をした人間でないと描けない絵がある。建築の勉強をした人間でないと、このできない保険の仕事もある。建築の勉強をした人間でないとできない鉄鋼の仕事もある。まあ、とにかくは、どんな勉強でも、どんな知識でもですね、あらゆる職業に生かして使えるんだという人間理解というものを、大きさのある人間理解というふうに、まあ、言うことができるわけですね。まあ、よくその芥川賞とか、直木賞とかって、文学賞をね、もらうこの人たちがですね、この建築会社に勤務しておった人がですね、その仕事上の体験とか、そういうものを書いてですね、そして、その賞をもらうっちゅうようなこともあります。それは、そういう建築の勉強をしたり、建築の仕事をした体験がなかったら書けない小説とかっちゅうのはあるわけですよね。いくらでも、いろんな能力がですね、いろんなふうに、このいろんな分野に生かせるんだというね、まあ、そういうことを知っておるということも自分というものをこのちっちゃくしない。大きく自分の可能性をですね、この羽ばたかせることができる。まあ、そういうことにまあ、なってくるわけですね。**

**で、こういうこのあらゆるこのものをですね、否定しないで、生かして使うというね、まあ、そういうふうなこの精神というものは非常に大事で、君は駄目なやつだというのは、その人のマイナス面を見ておるのであってですね、その人のいいところを見いだして、そして、ここは素晴らしいと言ってあげて、その面を伸ばしてあげるというふうなね、まあ、そういうこの対応の仕方を考えなければならない。どんな人にもマイナス面とプラス面があるんだからですね、マイナス面を見たら、その人を否定した気持ちになるんだけど、どんな人にも素晴らしい面がある。誰でも自分より優れたものを持っておるんだと。どんな人にも長所が半分ある。短所を見たら好きになれんけどね、だけども、どんな人にでも、自分よりも素晴らしいところが半分はある。どんな人にも長所はあるんだ。だから、その人の長所を見て付き合おうというようなね、そういうこの気持ちになる。それもやっぱり、人間の大きさなんですよね。短所を見たら好きになれん。相手の長所を発見して、相手の長所を褒めて、相手の長所を伸ばしてあげて、その人を好きになる。相手のいいところをこの見いだそうとする。まあ、そういう努力もね、やっぱり人間の大きさ、また愛として考えなければならないと。**

**まあ、そういうふうにして、長所も短所もですね、この否定しないで、長所も生かす、短所も生かす。まあ、そういうこの気持ちを育てていくと、この人間の大きさというものが出てくるわけですね。悪がなぜ存在するのか。そのことを知ることも人間の大きさをつくるね、重要な原理なんですよね。悪人を、犯罪者を単に責めて終わらないと。人間にはみんな偏見があるのであってですね、他人の偏見を非難しようとしない。自分にも偏見がある。そのことを知ってですね、そして、その自分の考え方の偏りというものを他人の考え方によって補ってですね、そして、その自分を成長させていこうとする。まあ、そういう気持ちが大きさというんですよね。で、そういうことをこう一言で言うと、対存在というね、あらゆるものは一対を成して存在しておるのであって、片方がなくなったら、片方はなくなってしまう。両方とも必要なんだ。そういうふうに考えていくと、このいろんなものがですね、その相補い合うために必要なんだという、そういうことがわかってきますからね。だから、いろんなものを生かして使う。何も否定しない。まあ、そういうふうなですね、この心温かな、豊かな気持ち、大きさのある心というものがですね、だんだん、だんだん、育ってきます。**

**これが、この人間がですね、宇宙大の心を持つっちゅうか、宇宙というのは、そういうこのマイナス、プラスがお互いに協力し合ってるという、お互いに補い合って、助け合ってるという、まあ、そういうことなので、人間もその宇宙の中に存在する一個のものなんだから、人間も宇宙なんだから、だから、人間も宇宙なんだから、宇宙と同じことをしなければならないと。宇宙と同じことをするっちゅうことは、あらゆるこの対立的なものをですね、その協力させる。あらゆる対立的なものを相互補完という、そういうお互いに補い合うという関係性にあるもんだというふうに、この意識してですね、そして、この関わっていく。そうすると、人間の意識は宇宙大に広がるというね、まあ、そういうふうな大きさを持ってくるわけですね。だから、まあ、人間の悟りというのはですね、俺は宇宙だとか、俺は永遠の生命だとか、まあ、そういうことを言うのが、まあ、悟りというふうにこう言われるわけですけども、実際、自分自身の命は宇宙の一部分を占めておるのであって、実際、俺は宇宙なんだと。だから、俺は宇宙なんだから、宇宙と同じことをしなければならない。宇宙と同じ原理で生きなければならない。宇宙と同じ原理で生きるならば、善はいいけど、悪はいかんと言うたらいかん。また、長所はいいけど、短所はいかんと言うたらいかん。長所も短所もなければならない。善も悪もなければならない。なくならないんだ。だから、それをどう生かすのか。どう理解するのかというふうにね、考えていく必要があると。そこにこの大きさのあるですね、この心、大きさのある精神、大きさのある意識というものを通して、人格の大きさをつくっていくという、まあ、そういうことがですね、成り立つわけですね。**

**まあ、それをまあ、対存在の原理。まあ、とにかくこの空間というですね、まあ、そういうこの広がりというものを使って、人間の大きさをつくっていくということを考えたならば、今、お話をした、どれだけの大きさの世界で自分が関わっておるかということと、空間そのものが全体的に一対という、対という構造であらゆるものはできておるのでですね、この両方ともを生かす、両方ともを認める。相対立する両方ともを生かしていく、認めていく。まあ、そういうふうなですね、この気持ちをわれわれはつくっていかなければならない。特に自分はこうだと言ったら、いや、そうじゃないじゃないかと言う人間が出てこなければおかしい。必ずそういう人間はおる。そういうふうに思ってることによってですね、そういう自分と違う考え方の人間が出てきてもむかつかないで、それは当然だというふうに認めることができるので、その自分の心が動揺しない。だから、大きさのある人間になれる。これだけ知ってるだけでも、随分とですね、人間関係というものがこの、まあ、豊かになっていくというかですね、人間関係で自分がつまずくということは、随分と、これだけでも少なくなりますよ。ぜひそうことを考えてですね、その自分と同じ考え方の人としかやっていけないとかですね、ちょっとした感じ方が違ったら、その一緒にやっていけないとか、そういうふうなちっぽけな人間で終わってしまうんじゃなくって、さらにそれを越えて、大きさのある人間になっていくということをですね、ぜひ考えてみてもらいたいと思います。**

**それができないと、やっぱり組織の中でこの生き抜いていくということは難しいです。で、またそのことがわかればね、この、ただ我慢したり、耐えたり、苦しんだり、悩んだりしながら、組織の中におるんじゃなくって、反対にこの自分自身を成長させるという、そういうこのきっかけとしてですね、そういうさまざまな対立というものを自分が受け入れていきますので、耐えたり、我慢したりするんじゃなくって、自分が楽しみながら、また自分の成長を楽しみながら、いろんなそういうこの問題、悩みと関わっていけるという自分ができてきます。問題、悩みは、自分を成長させるために出てくるんだ。問題、悩みがなかったら、成長はないんだ。対する人間も、自分を成長させるために出てきてくれてるんだ。自分の考え方の何が問題点なのかということを教えてくれるために自分と違う考え方は存在するし、出てくるんだ。そういう気分にね、なるだけで、人間は随分と大きさのある人間に成長できます。**

**実際問題、相手から学んで、自分を成長させるっちゅうことはできなくってもね、とにかく自分と違う考え方というのは、俺の考え方の欠落した部分を補うために、補完的に出てきてくれてるんだな。そういうふうにこう意識するだけで、もうその人間には人間としての心の豊かさと大きさができてきてしまいます。まあ、その意味で、まずはそういう意識をね、つくる。意識を持つということを考えてもらいたいと思うんですね。これはもう本当に組織の中で生きていくためにはね、根本にね、大事なこれは心構えというふうに言って差し支えないと思います。で、まあ、これからちょっと休憩を入れましてですね、そのあと、時間的全体性という観点からの大きさをつくる原理というものをお話をしたいと思います。じゃあ、ちょっと休憩を入れます。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半のお話に入ります。次は時間的全体性というこの観点からですね、人間の大きさをつくるという原理を考えるわけですけど、まあ、時間的全体性というのは、これはこの現在、過去、未来というね、まあ、そういうこの時間の幅ですね。現在から未来へ、現在から過去へというね、この時間の幅というものが、その人間の意識における大きさというものを決定する、まあ、そういう原理なんですね。そこで、その、まあ、このレジュメを見てもらったらわかりますけど、まあ、時間というのはですね、本当は、まあ、この生きた時間というのは今しかないんですよね。だから、このわれわれが一般的に意識する時間というのは、過去から現在へ、未来へという、そういうこの流れ方をね、するのがこの直進的な時間という、常識的な時間なんですけど、だけど、本当の時間というのは、実はこの現在から未来へ、また現在から過去へと流れるというね、まあ、そういうこの流れ方をしております。で、この生きた時間というのは、現在しかないということはですね、過去も未来も、本当には、まあ、存在しないので、今というこの時間の中にですね、この未来も過去も含まれておるというのはね、本当の時間のあり方です。**

**で、まあ、そのことを考えるとですね、この未来とはなんなのか。未来とは、今を生きる力である。未来のことを考えるというのは、未来のことを考えてるのも、現在、生きてる人間が考えてるのでね、未来も現在なんですよ。だけども、その未来というのは、なぜ必要なのかといったら、今を生きるためには、未来ということを考えないと、今を生きる力が湧いてこないんですね。未来とは、今を生きる力である。過去とはなんなのか。過去もやっぱり、この今というものをですね、この生きるわれわれの生き方というものをですね、教えてくれるのが過去であって、過去を意識することによって、今を生きる確かさというものが生まれてくる。本当の時間というのは、今しか存在しないというふうにね、言うことができるんですね。まあ、よく時間旅行とかいってね、SF、サイエンス・フィクションなんかではですね、未来に行ったり、過去に行ったりというようなことがいわれますけども、だけども、あれは観念で考えたらね、そんなこともありそうな話になるんですけど、現実的にはそんなことはできません。**

**未来というのは、この今の中にしかない。過去というものも今の中にしかない。過去というのはいったいなんなのかといったらですね、現実に存在する空間が持っておる時間的構造が過去だということになるわけですね。現実に存在する空間が持っておる時間的構造、すなわち、過去というのは、今ある空間から掘り起こされてくるわけですよね。今ないものは、永久にないんですよ。今の空間を掘っていくと、過去が出てくるんですね。だから、過去も現在なんですよね、その意味では。今ないものは永久にない。過去の時間というのは、空間化されてしまって、空間の中にしか過去はないんですね。だから、過去に行くというようなことはできないのね。今しかないんだからね。しかも、過去というのは、今ある空間の中だから、空間をがあっと掘っていったら、過去になってしまうんだけど、過去の時間に今から飛び込もうっちゅうような、そういうSFで考えるような、そういうことはこれは空想で考えるだけで、現実にはありません。**

**未来というのは、確実に今、生きてる人間が頭の中で考えるですね、まあ、そういうこの世界で、まだ事実にはなっていない世界が未来なんだからね、だから、SFで言うように、未来の事実の中に今から飛び込むというようなことはできないんですね。だから、現在しか時間というのは存在しない。まあ、その意味で、このわれわれが、過去とか未来とかということを言う場合でもですね、それは現在から未来を考え、現在から過去を考えて言うのであって、時間というのは、現在から未来へと流れ、現在から過去へと流れる。今、生きてる人間がその時間の現実を握ってるというかね、生きた時間は俺だというふうにね、言うことができる。まあ、そういうふうに考えるとですね、その人間の大きさ、自分の大きさというものをつくっていく場合には、自分の中でどういうふうに未来というものをですね、この、まあ、考えておるか。またどういうふうに過去というものを自分が意識しておるかですね、まあ、そういうこの未来というものの内容と過去というものの内容をいろいろこの人間が考える。そのことによってですね、その時間というものの豊かさが出てきて、そこから人間性の豊かさ、大きさ、幅というものがこうつくられていくというふうに、まあ、言うことができます。**

**そこで、まあ、順番に見ていきますとですね、まずその未来という観点からはですね、どこまでの未来を意識しながら、現在を生きておるかということが、その人間が大きいか、小さいかを決める。で、明日のことしか考えないで生きてる人間と、10年先のことを考えて今を生きてる人間とは、人間の大きさが違うと。明日のことしか考えないで生きてる人間と、10年先のことを考えて生きてる人間とは、今、何をするかというですね、その今することが違ってくるわけですよね。また、この10年先だけじゃなくて、100年先のことを考えながら生きてる人間と、500年先のことを考えながら生きてる人間とも、やっぱり大きさが違ってくる。いわゆる、今することが違ってくるっちゅうことですね。今することが、その明日のためなのか、10年先のためなのか、100年先のためなのか、500年先のためなのか。そのことによって、今、何をしておくかという、今することが違ってくる。まあ、そこにその今、自分のしてることの価値、意味というものがですね、この出てくるわけですね。100年先のことを考えて、100年先をこのどうこうしようということで、そのために今、何をしなきゃならんかというふうに考えていく。そうするとですね、この100年先と今というものがこうつながってきますからね、そういうところから、自分の意識の幅が広くなってくるわけですね。**

**まあ、そういうふうにして、この人間の大きさというものは違ってくる。だから、まあ、百年の計をもってとかね、言われるように、まあ、今、20世紀から21世紀に入って、新しい百年紀を迎えた。そういうことになってるわけですね。で、今、2007年ですから、新しい百年紀を迎えて、そして、もう７年もたってるわけなんですけど、残念ながら、あんまりですね、その百年の計をもって物事を考えるというようなことをしてる人はあんまり少ないのね。ついつい目先のですね、目先のちっぽけな問題に関わってですね、この悩み苦しんでおるという人が多い。だけども、本来はですね、100年先にはわが社はどういうふうな、この状態にありたいか。まあ、そういうふうなことを考えながら、また自分の家庭は100年先にはどういうふうなですね、この家庭にするか。やはり自分自身から考えて、３代先までこの自分の家のですね、ことを考えながら、そのために今、どういう仕事をしておこうか、どういうふうに子どもを育てようか、どういうふうに金をためようか。まあ、そういうことを考えながら生きる。まあ、そういうこの生き方をするのとね、もう明日のことしか考えない。目先のことしか考えないで、しか生きないというね、まあ、そういうこの人とは随分とね、人間のこの価値というか、人間の大きさというものが、まあ、違ってくるわけですね。**

**それと同様に、今度は過去ということが、どこまでの過去を意識しながら現実を生きておるか。これは昨日のことしか考えてない人とですね、自分が生まれてから、今日のことを考えながら生きてる人と、あるいは明治時代のころから考えながら、あるいは平安時代のころから考えながら、また人類がこの世に生まれたですね、まあ、そういうこの段階からのことを考えながら今を生きる。あるいは地球ができたときからのことを考えながら、今を生きる。まあ、そういうふうなですね、この過去に、どこまでの過去を意識しながら、現実を生きておるかということによってもですね、今の生き方が違ってくると。で、確実にこの今というのはですね、過去の積み重ねで現在がありますので、そういう意味で、どこまでの過去というものを意識しながら、現実を生きておるかによって、その今を生きる確かさというかですね、まあ、そういうこのものが違ってきます。だから、昨日のことしか考えてなかったり、明日のことしか考えてないって、そういう人たちは、だいたい、まあ、なるようにしかならないと。どうだってええじゃんというかたちでですね、まあ、風に吹かれるままにというか、あんまりいろんなことを考えないで、そのときばったりの流される生き方という、そういうふうなかたちにですね、なってしまいやすいんですよね。**

**だけども、この昔のことを考えるといったら、ご先祖さまのことを考えたりですね、いろいろ歴史的なその過去のことを考えたりなんかしておるとですね、そうすると、いろんなことがこの頭に浮かび上がってきてですね、そして、その自分の、自分をここまで育ててくれたのは、お父さん、お母さんで、いろんなことの苦労をしながら、こうやって自分を育ててくれた。そういうこの自分が生まれてから今日までのいきさつをですね、振り返っていくと、そうすると、やっぱり、自分もちゃんとお父さん、お母さんの期待に応えるために頑張らないかんなとかですね、過去の自分の祖先にはこんな立派な人がおったと。だから、自分もそういうような立派な人になりたいなとか、まあ、そういうふうなことがですね、出てきたりなんかして、単にその昨日のことしか考えないで今日を生きてる人とは全然違った現実の生き方というものがですね、出てきたりします。**

**まあ、そういう意味で、どこまでの未来を意識しながら現実を生きてるか。どこまでの過去を意識しながら現実を生きてるかという、人間の生き方が違ってくるわけですね。その生き方というものが、その人の人間としての価値、どういう生き方をするかという、その生き方の中にですね、いろんなこの内容というかですね、いろんな思いがね、こもってきますので、その現実を生きる生き方の中にいろんな思いがこもるということが、その人の、まあ、精神的な豊かさ、あるいは、この意識の面の大きさというふうなものをですね、だんだんとこうつくり上げていくという、まあ、そういうかたちになってくるわけですね。まあ、そういう意味で、この少しでもより遠くのですね、未来というものを見つめながら、現実を生きるということができる自分というものをね、つくっていくという努力も、これもやっぱり、自分の大きさをつくるということになってきますし、どこまでの過去をこう自分が意識しながら現実を生きるかという、この自分が今、何をしたらよいのかということを考えるうえで、この過去からずっとこの積み重ねとしてのですね、自分のこの人生というものを見ていくと、そのことによって、やはりいろんな思いがね、自分の中にこう湧いてきますから、それだけこの自分の現実を生ききる気持ちの確かさ、あるいは、この心の中でのいろんな思いの豊かさというものがですね、決まってきます。まあ、とにかくこの時間の幅が人間の大きさになってくるというね、まあ、そういうことをですね、まず考えてほしいと思います。時間の幅が狭いということは、それだけこの自分の生き方が浅い、狭い、そういうことにね、なってくる。まあ、とにかくこの現実に流されるような生き方をするか、あるいは、このしっかりと過去にも根を下ろし、また未来を見据えながら現実を生きるという、確かな生き方になるかですね、まあ、そういうこの違いがこういうところから出てくるわけですね。**

**それから、２番目はですね、先を読む力、どこまでのこの先を見通しながら、現実を生き切るか。ただ、この未来を意識するというだけじゃなくってですね、どこまでの先が読めてるか。必ず先はこうなるんだというね、まあ、そういうこの先を読む、先見力と申しますけど、まあ、そういうこの先を読む力というものがどんだけあるか。これもやっぱり、人間の大きさを決めるんですね。まあ、将棋とか碁なんかでもですね、何手先まで読めるかによって段が決まるわけです、だいたいね。で、ずっともう勝負が付くところまで読んでしまってるとですね、そうすると、このいろんな紆余曲折があってもですね、その中でいろんな手を相手は打ってくるわけですけど、だけど、その打ってくる手が全部読めてればね、それに対する自分の対応もちゃんとこう即座にできるというようなことになってきてですね、そして、この、まあ、そのことによって、相手にこの勝てるというか、相手の打ってくる手がわかりますので、そのことに対してどう対応するかということもですね、即座にできてくる。まあ、そういうところから、その人間の、まあ、実力っちゅうんですかね、この力というものの程度は決まってしまうんですよね。**

**で、読みが浅いと、この相手が打ってくる手にいちいち考えてしまったりなんかしてですね、なかなかこう次の手が出てこないというような、そういうこう迷いが生じてくるわけですけど、ずっと先まで読めておると、こういう手もあり、こういう手もあり、こういう手もあるという、そういう手の中で相手が打ってくるもんですから、こういうふうにきたらこういこうって、すぐこうわかるもんですからね、その意味で、どんな手が出てきても自分が動揺しない。まあ、そういう大きさがね、つくられてくるわけであります。まあ、とにかくは、どこまで先が読めてるか。いろいろどんなことが起こっても、必ず先はこうなるんだというね、まあ、そういう見通しがちゃんと付いておるとですね、非常に、まあ、ぐらつかないというかね、びくつかないというか、信念を持った、信念を持った確かな生き方ができてくる。先見力というのは、そういう意味で、非常に大事なですね、人間の大きさをつくる原理です。どこまで先が読めてるか。必ずこうなるというね、まあ、そういうこのことが言えるという人と、どうなるかわからんっちゅう人とでは、全然、これはやっぱり、大きさが、人間としての確かさ、大きさが違ってきます。**

**で、そういうふうなこの先を読む力っていう、先見力というものをですね、このつくっていくためにはどうするかっちゅったら、過去を読むという、この歴史観というものが要求されてくるんですね。先を読もうと思ったら、今の時代がどういうふうな方向性に動いておるのかということがちゃんとわかってこないと、先が読めません。まあ、その意味で、この先見力というものをつくっていこうと思ったら、過去を読む力、歴史観というものをちゃんと持たなければならないと。で、ずっとこの歴史の流れがですね、その過去からずっと現在に至るまで、自分の中でこの、まあ、どういうふうにこう歴史が動いてきたのかということがちゃんとわかってくると、こういうふうに動いてきたんだから、将来はこうなるよなというね、まあ、そういうこの見通しができてくるわけですよね。で、まあ、そういうこのことのために歴史観というのは必要なんですけど、まあ、歴史観というものをいろいろなこの過去に対する解釈の仕方があってですね、まあ、私がこのお話をする歴史観というのは、まあ、何回かこのアサヒグローバルさんでお話をさせてもらってるんですけども、とにかくこの時代というものはですね、常にその時代の中心を担う、この風土というものを移し替えながら今日に至っておると。**

**すなわち、今のこの人類の文明、歴史が始まったのは、アフリカ中部の大地溝帯である。で、このアフリカ中部の大地溝帯から始まった人類の文明というものがですね、やがて北部のエジプトに行き、またメソポタミア地方に行き、そこから地中海のほうに行って、そのペルシャ、ギリシャ、イタリアと行って、そしてこのヨーロッパに行って、そして、イギリスに行って、アメリカに行って、そして、今、アジアが燃えるっちゅうことで、このアジアにやってきて、そして、今、世界文明の中心は日本の真上にある。で、日本から、次は韓国、中国、インドというふうにですね、世界文明の中心は移っていって、歴史が形成されるんだというふうに、こう読めてくるわけですよね。これは歴史観というものがちゃんとしっかりしてるから、だから、必ずこうなるというね、そういう未来というものがわかるわけであります。そういうことがわかってきたらですね、新しい時代をつくろうと思ったら、文明の中心をまったく新しいところに移さなければならない。すなわち、風土を変えないと、新しい時代はやってこないという、そういうふうなことがですね、この読めてくるわけであります。**

**で、日本の歴史を考えてもですね、日本の古代というのは、今の奈良県、大和地方だった。そして、中世の時代は京都に行って、平安遷都で京都に行ってですね、そして、この日本の中世の時代がつくられた。そして、武士の時代になって、日本の政治の中心は鎌倉に移る。だけど、鎌倉は非常に狭い平野しかなかったので、あっという間に時代が終わってしまって、そして、その足利尊氏によって、もう１度、この京都の室町に政治の中心が移っていった。だけど、京都というところは、平安時代にその風土が持つ個性、役割を果たし終えてしまった風土なので、もう国家を発展させる力を風土は持っていない。だから、京都に２回目に都を持っていったと同時に、国家は乱れ始めてですね、そして、戦国時代になってしまう。そして、この豊臣秀吉によって徳川家康が関東に移封される。関東が政治の中心になる。そのことによって、日本の近代が始まる。そして、今、東京はもうすでにですね、政治の中心になってから400年以上経過した。だから、いつまでも東京に日本の都を置いておいたのでは、日本に新しい時代はやってこない。日本に新しい時代をこの呼び起こそうと思ったならば、東京からまったく違う新しいところへ日本の都を移さなければならない。そうしないと、日本には未来はないぞということがわかってくるわけですよね。こういうのを、まあ、歴史観というものに基づく先見力というふうに、まあ、言うわけであります。**

**そして、これからね、日本から中国へ、中国からインドへとこの世界文明の中心が移行していく中で、アジアが燃える。アジアが発展する。そして、このやがてアジア人が西洋人がつくった文明よりも、より素晴らしい文明をつくり出してですね、そして、このアジア人が西洋人を、まあ、助けてあげるような、まあ、そういう時代がですね、やがてはやってくる。まあ、そういうことを考えたならばですね、われわれはいつまでも、西洋人、欧米人を尊敬するというふうな、まあ、そういうこの意識になっておったらいかんのだ。これから、われわれが欧米人にいろんなことを教えて、新しい時代を教えて、そして、この彼らを助けてあげるという、そういうふうなですね、この立場に立たなければならないんだ。そして、アジアが発展するんだから、発展するアジアとともにわれわれは生きなければならない。欧米からアジアへと目を向けていかなければならない。そういうアジア人とともに生きるという力をつくっていかなければ、いつまでも欧米人を尊敬して、アジア人をばかにするような、そういうこの差別的なですね、この意識を持っておってはならない。そういういろんなことがね、わかってくるわけであります。**

**で、こういうこの先見力を持ちですね、また過去への歴史観というものを持つことによって人間の大きさが決まるので、先見力もなく、また歴史観もないというね、そういうことではですね、このとき、時間というものをちゃんとこう理解するね、まあ、そういうこの時間をつくり出すというか、未来というものもわれわれがつくり出すものであってですね、また過去というものもわれわれがそれをどういうふうにこの理解するかによってですね、現実の生き方が違ってくるという、まあ、そういうものですので、過去をどういうふうに理解し、またどういうふうに未来というものをわれわれが考えるかね。そのことはちゃんとできてる人と、できてない人とではですね、どうなるかわからんという、そういう状態の人と、必ずこうなると言える人とでは、全然、そのやっぱり、力が違いますし、またその人の生き方というものがですね、格段の違いが出てきます。その意味で人間の価値が決まる、人間の価値が違ってくる。それも時間的な観点から言うならばですね、そのどこまで先がちゃんと読めてるか。どこまでの覚悟がちゃんと読めてるか。その時間の幅がですね、その人間の大きさというものを決定するんだというふうにですね、言うことができるわけで、大きさのある人間になろうと思ったら、先見力を養わなければならない。絶対こうなるぞと言ってですね、こうなるんだから、みんなこうしていこうやっちゅって、リーダーシップを発揮してですね、引っ張っていく。まあ、それが、まあ、大きさのある人間、統率力というね、大きさのある人間ということで、まあ、なれるわけですね。**

**統率していこうと思ったら、未来を明確にみんなにこの示さなければならない。まあ、ちょっと同様に、そういうこの過去というものをですね、ちゃんとこう説明してですね、こうこう、こうこう、こういう流れなんだから、だから、こうなると言ってですね、その過去に対する理解というものも、この、まあ、反論の余地がないようなね、まあ、そういうこう確かなものとして過去というものを理解する力、そういうものをつくっていくと、そのどこまでの過去が読めてるかという、この力の違いでですね、人間の大きさもまた違ってくる。全然、過去がぼやっとしてわからんというですね、そういうふうな状態では、この意識が混沌としてますからね、だから、その分だけ、この精神的な内面というのが、ぼやけてしまってるので、大きさというものを感じさせない。頼りにならんという、そういう感じになってきますから、小さな人間で終わってしまう。まあ、とにかくこの歴史観というものをどういうふうにですね、持って、過去はこういうふうに流れてきたんだから、未来は必ずこうなる。まあ、そういうふうな確かなですね、この時間のプロセスというものを自分がつかむことができたとき、人間の大きさというものができてくるというふうに、まあ、言うことができます。**

**で、第３番目ですけど、第３番目はこの未来という観点からは理想の大きさですね。どれだけの大きさのある理想を未来に掲げることができるかですね。理想が小さいということは、それだけその人の意識はまだ小さいっちゅうことであって、未来にどれだけの大きさのある理想というものを掲げることができるか。理想のこの、未来に掲げる理想の大きさですね。それがその人の人間の大きさというものを決定する時間的原理である。夢とか、希望とか、理想とかですね、申しますけども、まあ、そういうこの夢、希望、理想といってもですね、どの程度のこの内容を持っておるのかということによって、その人の、まあ、描く未来の、まあ、幅が決まってくるというかね、この、まあ、理想というのは、その今を生きる力というふうにこう言うことができるものですけど、未来に描く理想が小さければね、それだけ現実を生きる人間へのインパクトが少ない。未来に描くその理想の内容が大きいとですね、それだけこの現実に対して非常に大きなですね、インパクトを与えてくるということで、今を生きる力にエネルギーがこう出てくるわけですね。まあ、そのことを考えると、その理想が大きい。大きなこの夢を描く力、理想を描く力というものがですね、この人間の大きさづくりには必要だと。だから、夢といってもですね、家庭的な夢なのか、あるいは社会というものを変えるような夢なのかですね。国家というものを変える、国家を動かすというような夢なのか、世界というものの新しいやり方を考えるという、そういうことなのか。まあ、いろんなこの夢においても、大きさ、レベルの違いがあります。**

**で、そういうこのどの程度のですね、この大きさの理想を描くことができるかという、そのこともですね、やっぱりこの歴史観というですね、この過去をどういうふうにこの読み取るかというふうな、まあ、そういうこのこととですね、関係してきてですね、今、われわれがどういうこの問題を解決しなければならないのか。またどういうふうな、この、まあ、悩みに答えていかなければならないのか。またどういうふうなですね、欲求というものを今、われわれが持っておるのか。今、われわれが持っておる問題とか、欲求というもののですね、このつかみ方が、未来というもののですね、この理想の大さというものに、まあ、関係してきます。すなわち、その今の自分の問題意識というものが、国家的なもんなのか、世界的なもんなのか。今、人類がどういうことで悩んでおるのかということを考えてですね、そして、その人類が今、悩んでる問題に対して、俺がなんとかしたろうやないかという、そういう気持ちを持ってですね、立ち上がるというか、理想を持てばね、世界的なその大きさのですね、そういうこの夢が描ける理想が持てる。また、今、国にどういう問題があるのかっちゅうことを考えて、その国の問題に対して、俺がなんとかしたろうやないかと、そういう立ち上がり方もあるわけですけど、それは、まあ、世界じゃなくって、国というね、そういうこの原点のある、この、まあ、レベルでの夢というものを持つことができるだけである。**

**まあ、その業界の問題に対して、自分がなんとかしようとこう思うとかですね。あるいは、家庭の問題に対してどうしようと思う。それによって、それぞれ夢のですね、大きさが全然違ってきます。で、夢というのは、原理としてはですね、この自分がどういう人間になりたいのか。どういう仕事がしたいのか。また、どういうこの人生を自分が歩みたいのかですね、まあ、そういう自分の命から湧いてくる欲求というものによってもですね、その夢の内容が、まあ、違ってきます。どういうふうにすれば理想というものを持って、この未来に夢を掲げながらですね、現実を生きることができるか。で、そういうこの夢とか、理想とかですね、というものを、自分にこの与えてくれる。それがこの今の社会や世界にどういう問題があるのかということを、まあ、知ることなんですね。で、問題というものを、俺には関係ないと言ってしまうんじゃなくって、そういう問題を俺がなんとかしよう。俺がなんとかしたろうやないか。そういう思いで立ち上がってくることによってですね、この世界に問題がある。それに向かって立ち上がれば、それを俺がなんとかしようと思ったら、世界的なですね、大きさのある夢が、理想が描けるという、そういう、まあ、人間になれるわけですよね。どういうふうにして、問題というものを自分がつかみ取るか。問題を解決することによって未来がつくれますので、どういう問題を自分がつかみ取るか。そのことによって、理想の大きさ、夢の大きさが決まるわけですね。**

**未来というのは、今ある欲求と、今ある問題が、未来というものをつくっていく原理です。先見力ということにも関係しますけどですね、未来がどうなるのか、未来がどうなるのかということは、今の社会にどういう問題があるのか。また、今、生きてる人間がどういう欲求を持っておるのか。そのことを見るとですね、未来がどうなるかは見えてきます。結局、人類というのは、今ある問題、今ある悩みを乗り越え、解決することによって未来をつくっていくんだし、今の自分の命から湧いてくる欲求というものをですね、この実現することによって、欲求というのはまだ実現されていないもんだから、欲求ですからね。欲求を実現することによって、また未来ができてくる。まあ、そういうことを考えたならばね、命から湧いてくる欲求のない人間には、未来というものをつくる力はない。また、今、社会や世界に存在する問題というものに応えていこう。それをなんとか解決しようという意欲のない人間には、未来が見えないし、未来に理想を描けないというね、まあ、そういうことになってきます。まあ、そういう意味でも、この理想をつくるというね、理想を持つという、まあ、そういうこの人間の大きさ、理想を持った人間は大きな人間で、理想のない人間はちっぽけな人間だ。その意味で、その大きな理想を自分が持って生きるというね、まあ、そういうこの生き方をしようと思ったら、われわれはこの今の世界にどういう問題があるのかということをいろいろ知って、調べてですね、そして、何かしら、そのことに対して、自分なら何ができるだろうか。まあ、そういうふうなことを考えていかなければならないということですね。**

**まあ、会社なんかでも、いろんなこの事件が世界に起こるわけですけど、その事件が起こったときに、わが社なら、わが社なら、その問題に対してどういう貢献ができるだろうか。どういう役に立てるだろうか。わが社として何かしら、その問題に対して対応できることはないだろうか。そういうことを考えていくことによって、また会社の夢も広がってきたりですね、会社にまた新しい芽が出てきたりするということもあります。とにかく、この問題、今の社会にある問題とか、悩みとかですね、事件だとか、犯罪だとか、事故だとか、いろんなことがありますけど、それを自分に関係ないものとして考えるんじゃなくって、そういうこのさまざまに起こってくるこの問題のある現象に対して、俺がなんとかできないだろうか。自分ならその問題にどう対応するか。そういうことを考えていくことによってですね、この未来に目標を掲げたり、あるいは、理想や夢を描いたりというようなことがですね、だんだんとできてくるようになるわけですね。まあ、とにかく夢のある人間、理想がある人間と、夢がない、理想のない人間とは、人間の大きさが違う。人間の値打ちが違う。そのことをですね、考えてみてもらいたいと思います。**

**それから、この未来との関係性で見た理想ということが大きな課題になるわけですが、今度は過去との関係においては、過去へのロマンというね、まあ、そういうこの問題が出てきます。すなわち、過去というものをどのようにわれわれが意識するかということですね。で、過去へのロマンというのは、まあ、現在というのは、その過去の積み重ねで現在が成り立ってますので、その意味で、過去を知ることによって現在がわかる。で、そういうこの過去にどういう事実があったのか。まあ、その過去の事実がですね、現在の社会にどういうふうな影響を持っておるのか。及ぼしておるのか。そのことによって、この過去の持つ意味がですね、この自分にわかってくる。そして、その過去の事実をですね、現在を理解するための、まあ、原理というかですね、そういうものとして自分が考え始めることによって、過去の意味、過去というものが持っておる、その現実に対するこの関係性というのがですね、自分でわかってきて、そして、そのことによってですね、今というものを自分がどう生きたらよいのかというね、まあ、そういうことがこうつかめるようになってくる。で、過去へのロマンというのは、過去というものをどの程度、意味のあるものとして、どの程度、価値があるものとして、どの程度、素晴らしいものとして過去というものを意識できるか。描き出すことができるかということなんですよね。**

**学校で学ぶ過去というのは、ただ何年何月何日にこんなことがあったって事実だけなんですけども、だけど、その事実という、過去の事実というものがですね、今を生きるわれわれに、どういう意味や価値や値打ちや素晴らしさを持っておるのかということを考えるということが、過去へのロマンというんですよね。過去がどの程度、現実に対して値打ちを持ってるか。意味を持っておるか。そのことによって、過去の素晴らしさ、過去の重要性というものが、まあ、意識されてきます。そういうことがわかってくると、人間、大きくなるわけですね。過去の意味が全然わからないというか、過去というものが現実に対してどういうふうな関わりをしておるのかということが、全然、そんなことを考えないで生きてればですね、それは浅い生き方になり、またその混沌としたですね、まあ、そういうこの意識で生きてるということになってきて、過去が無意味になってきます。ただ、今のことしかわからんというふうな、そういうことになってきて、今を生きる生き方が定まらない。どうだってええじゃんということになってきますので、過去というものとの現在との関わりというものをですね、この自分がちゃんと考えて、そして、そのなぜ現代、なぜ今、こういう状態になったのか。過去にどういう問題があったから、どういう事件があったから、どういうことがあったから、今、こういう時代になったのか。そういうことをちゃんとこう自分がわかってくることによって、この、まあ、過去とのつながりというものを考えながら、現実をこの生きるというね。そういうこの確かさが出てくる。**

**だから、こうせんないかんという、まあ、そういうふうなですね、意識ができてくる。まあ、そのことによってですね、われわれはこの現実をより豊かに生きる。現実をより確かに生きる。まあ、そういうこの力がですね、できてきます。過去を知らなければ、この今を生きる確かさというものが出てこない。過去にさまざまなこの思いをですね、はせることによって、われわれはこの今の自分の生き方というものを学ぶ。まあ、そういうことができる。過去から学ぶということは、まあ、よく言われますけどね、歴史から学ぶということは言われますけど、過去にもこういうことがあったよな。だから、今度もこういうふうになるよな。そういうことで、じゃあ、今、どうせんないかんかな。そういうことをね、考えたりして、歴史から学ぶ。まあ、多く人生というのはですね、その過去に生きたさまざまなその人の死ぬまでのいろんなプロセスを学ぶことによって、この自分の現在のいろんな問題をどういうふうに乗り越えたらよいのかというようなことをですね、過去の人間の生き方から学んで、それを参考にして今を生きるということもできる。**

**まあ、よく政治とか、経済界なんかでもですね、過去の大政治家、大経済人というふうなものの伝記をね、いろいろこう読んで、そして、その今、われわれは目の前の問題にどう対応したらよいのかということを学ぶというふうなこともよく、まあ、世間ではなされております。まあ、そういうことで、この過去に思いをはせてですね、過去の価値というものをどういうふうに現実にこう生かしていくかですね、過去から学ぶということをすることが、この今を生きる人間の大きさというものをね、つくっていく。なんにも過去のことを知らないで、現実を生きておったら、経験の積み重ねというかですね、まあ、そういう判断材料がないもんですから、この行き当たりばったりのですね、この判断になってしまうということもありますけど、過去のことをいろいろ知ることによってですね、過去もこういうことがあったと。そのときは、この人はこういうことをして、そして、失敗したとか、うまくいったとかっていうことが学べる。そのことによって、われわれは今もやっぱり、そのことを考えたら、こうせんないかんなとかっていう判断がですね、できてくるわけですね。そのことのために、この過去のことをいろいろ調べるということは、非常にこの今を確かに生きるために大事なことになるわけですね。**

**まあ、それは過去へのロマン、過去にロマンをはせるというね、そういうことになってきます。ロマンというのは、事実に対して意味や価値や値打ちや素晴らしさを与えていくと、それはロマンというね、まあ、そういうこのかたちになってくるわけです。事実はいかようにでも解釈できますのでね、その事実をどういうふうに解釈するかによって、その過去の事実がいろいろこの意味や価値を持ってくる。過去の事実が持っておる意味や価値というものを、まあ、ロマンというふうにね、表現することができる。こんな素晴らしいことがあった。ただ事実が、こういう事実があったっちゅうだけじゃなくって、こんなすごい人がおった。こんな素晴らしいことがあった。こんな事件が起こって、その結果、こういうこのすごいことになった。まあ、そういうふうなですね、その事実が持っておる広がりというものをね、こう考えていくのがロマンというふうに、まあ、言うことができるわけです。事実が持っておる意味や価値や値打ちや素晴らしさというものを考えていく。それができるかどうかでですね、人間の大きさ、心の豊かさ、現実を生きる人間の生き方のこの重みとか、深さというようなものはですね、できてくるわけであります。まあ、とにかくこの理想の大きさとロマンの大きさですね。それがこの現実を生きる人間の大きさというものをつくる、第３番目の時間的原理である。**

**で、次は最後、第４番目ですけど、第４番目のこの未来との関係性から出てくる原理はなんなのか。これは人間は、やがて皆、死ぬわけですね。で、死というものをどのように自分が意識するかによって、人間の大きさが違ってくる。ほとんどの人はですね、年を取って老衰で死んでしまうとかですね、病気になって死んでしまうとか、交通事故で死んでしまうとか、だいたい殺される人生なんですよね。いわゆる死ぬのを待つというね、その殺されるという、そういうこの人生になってしまいやすい。で、そういうのは、いわゆるこの自然死というかですね、相手任せの、まあ、そういう死に方である。だけども、人間というのは、文化をつくる動物といってですね、このやがて死ぬということがわかっておったらですね、じゃあ、どういう死に方をしようか。どこで死のうか。どういうふうにしてこの死を迎えようかということをですね、考えるというのが、まあ、人間、文化をつくる動物という、人間というもののこの意識のあり方であります。そういうことを考えていくとですね、ただおめおめと、この何かによって殺されるのを待つんじゃなくってですね、このどういう死に方をするかということを考えるということは、どういう生き方をするかということに結び付いてきてですね、そして、こういう死に方をしようということにこう自分がなってくるとですね、そうすると、この、まあ、そのことによってですね、まあ、自分のその生き方としてですね、このためになら、自分は死んでもいい。このために生きて、このために死ねたら本望だというね、まあ、そういうこのものを持って死ぬという、そういうこの生き方がそこから考え出されてくるわけですね。**

**で、こういうのを死の自覚というふうに言ったりですね、あるいは、死の文化というふうに、まあ、言ったりします。で、その死の文化といわれるものの最もこの典型的なものが、切腹というね、日本人がつくり出したこの死の文化、切腹という文化です。切腹というのは殺されるんじゃなくって、死ぬときは自分で自分の命を絶つ。まあ、そういうふうなですね、この自覚的に死ぬというかですね、この殺されないものになるというね、まあ、そういうふうなこの生き方をするという、まあ、そういうこのことを人間は考え出したわけですよね。で、殺されるというのは、この人間として非主体的なですね、何かしらこう情けないあり方である。その意味で、この死に方も、死ぬときも、俺が選ぶというですね、まあ、そういうこの死を自覚化する。そして、その死に方も、死ぬときも、自分がつくる、選ぶという、まあ、そういうことをするということは、この死というものをですね、人間的に、まあ、人間の力を死という、やがてやってくる自然の死というものに対して、人間の力を加えて、そして、その死というものを、まあ、文化にしていくというね、まあ、そういうふうなこの生き方というものが、まあ、人間がつくったこのもので、まあ、その１つが、まあ、切腹ということなんですね。**

**で、切腹というのは、これはなんなのかといったら、死というものに意味をですね、このつくっていく。で、そのただ死ぬんじゃなくって、死というものをもって、何かしら人にですね、いろんなことを感じさせるというふうなね、まあ、そういうこのことを考える。死というものの意味を考える。そのことによって、人にいろんな思いをですね、この伝えていくというふうな、まあ、そういう文化がですね、生まれてくるわけですね。で、そのことによってですね、この殺されるんじゃなくって、殺されないものになる。自分の命は自分で始末する。まあ、そういうふうなこの意識がね、生まれてくる。殺されないものになるっちゅうことはどういうことなのかといったらですね、このためになら、俺は死ねるというものを持つということが、この殺されないという、そういうこの死のあり方なんですよね。ということを考えると、このためになら俺は死ねるというものを持って生きてる人間と、死ねるというものを持っていない人間とは、人間の価値が違う、大きさが違う。で、それはどういうことなのかといったら、このためになら俺は死ねる、このために生きて、このために死ねたら本望だというものを持って生きてる人間は、確かにその命が燃えるというね、まあ、そういうこの生き方ができる。だけども、このためになら、自分は死ねるというふうなものを持っていない人間というのはですね、どちらかといったら、命が燃えるということがない。なんとなくこのずるずるずるっと生きて死んでしまうような、そういうこの自然に殺されるみたいな、その殺されるときを待つみたいなですね、まあ、そういうこの状態になってしまう。**

**で、命というものは、このためになら俺は死んでもいいというものを持ったとき、命は完全燃焼する。命そのものは、生きたい、生きたいと思ってるもんなんですけども、生きたい、生きたいと思ってる命が一番輝くとき、それは生きたい、生きたいと思ってる命が、このためになら俺は死ねる。そういうものを持ったとき、命は最も美しくも激しく燃え上がる。その意味では、死んでもいいと思えるものを持って生きてない人間の命は、不完全燃焼の命、くすぶった命だというふうに言わなければならない。そういうこの燃えて生きるという生き方というものがですね、このできないということは、それだけ人間の生き方として価値が低い、意味があまりない。結局、そういう人は、人生つまんない、つまんないと言ってですね、この嘆きながら死んでしまうようなことになってしまう。このためになら俺は死ねるぜ。そういうものを持ったとき、初めてですね、生きがい、あるいはこの命が燃えるという、そういうこの、まあ、喜びというものをですね、この命に感じながら、人生を生きることができる。まあ、そこにその完全燃焼というね、まあ、そういうこの生き方がね、このできてくるわけであります。**

**まあ、そういうことを考えると、この人間はやがて死ぬんだけど、未来には必ず死が待ってるんだけど、殺されるのをおめおめ待つ。そういうこの生き方をするんじゃなくってですね、このためになら俺は死ねるというものを持ってですね、そして、その死に方を自分が決めるという、そういうこの生き方をすることによってですね、人間の大きさができるというふうに、まあ、言うことができるわけですね。このためになら俺は死ねるというものを持ってない人と、このために俺は死ねるというものを持ってる人とは、人生の価値が違う、人間の大きさが違うということになってきます。で、まあ、それをまた違った言い方をすると、自然死っちゅうのは時間によって殺されるというふうにね、この言うことができるんですけども、昔からこの不老不死とかっていってですね、この老いない、あるいは、不死というのは死なないということですけども、不老不死の妙薬というものを探すというようなことがですね、昔はよく言われました。まあ、現在でも若返りの薬とかですね、その老いないためにとかなんとかって、いろいろこの薬があったりしますけど、だけど、この本当の不老不死の妙薬とはなんなのかといったらですね、不老不死の妙薬、不死というのは殺されないものになるということなんですね。で、殺されないということは、この時間の支配を超越してですね、そして、その時間によって殺されない。死ぬときは俺が死ぬので、時間によって支配されない自分。それが、まあ、その不死の境涯というふうに、まあ、いうんですよね。で、その不死の境涯という、そういうこの殺されないものになる。そういうこの不死の妙薬とはなんなのか。それがですね、このためになら俺は死ねるというものを持つということが、不死の妙薬、殺されないものになったというね、まあ、そういうこの薬なんですね。**

**で、実際問題、このためになら俺は死ねるというものを持って生きることは永遠の青春だ。このためになら俺は死ねるというものを持ってる限り、命は永遠に輝く。だけども、このためになら俺は死ねるというものを持ってないようなですね、まあ、そういうこの命の使いどころというものが定まらないような、まあ、そういうこの生き方をしておったのでは、命は輝かない、命は燃えない。だから、半端な人生で終わってしまう。結局、人生に悔いを残すというね、まあ、そういうこのことになってしまうわけであります。で、そういうふうな悔いを残す人生とですね、燃え尽きて死ぬという、この永遠の青春を生き、死ぬまで命を燃やし続けることができる。まあ、そういうふうな人生とはですね、やっぱり大きさが違ってくるわけですね。その意味や価値が違ってくる。まあ、そういう意味においても、大きさのある人間になるということはですね、まあ、大人物とかって、そういうこの人というのは、このために生きて、このために死ねたら俺は本望だ。このためにならば、俺は殺されてもいい。まあ、そういう覚悟を決めてですね、生き切るという生き方というのが、やっぱり、人間として大きさのある生き方というふうに言うことができるわけですね。死というものをどのように、未来に必ずやってくる死というものをどのように自分がこの受け止めて対応するかですね、この死の自覚ということが、人間の大きさ、小ささというものを決めてしまうというふうにね、言うことができるわけですね。その基本原理は、このためになら死んでもいい。この仕事のためになら死んでもいい。死んでもいいと思えるほどの素晴らしさというものを仕事に発見したり、あるいは、愛する人に発見したり、まあ、そういうことができたときですね、その人の人生は輝く。その人は価値のある、大きさのある人生を生きることができる。まあ、そういうふうに、まあ、言うことができます。**

**まあ、ぜひその意味でですね、この人生というのは、会社で働く時間が８時間以上ある。また家庭の中でのですね、生活も、まあ、８時間ぐらいはあるかもしれませんけど、だけど、多くの人はですね、ほとんどの人生を会社というね、まあ、そういうこの中でですね、過ごすわけであります。しかも、一番この意気盛んな20代からですね、70歳に至るまでのそういうこの人生の花盛りを会社というものを舞台にして人間は生活するわけですね。そのこともですね、考えれば、やっぱりわれわれは、今、自分のやってる仕事の中にですね、このためになら俺は死ねるぜ。まあ、そういうふうに言うことができるようなね、命を燃やすものをね、やっぱり発見するべきだと。もちろん、この家族やね、愛する人のために命を捨てるという、まあ、そういう生き方もね、この素晴らしいんですけど、それも大事なんだけど、もう１つ、仕事に命を燃やせるというね、そういう生き方も自分の人生を充実させて、素晴らしいものにするために大事なこれは原理なのでね、ぜひどんな仕事にでも意味や価値がある。どんな仕事にでもですね、素晴らしさがある。この仕事をせんことには、この醍醐味はつかめんぞというね、そういうものがどんな仕事にもあります。仕事が違うっちゅうことはね、他の仕事にはない素晴らしさというものをその仕事は持っておるというふうに言うことができますので、ぜひこの仕事をしながらですね、また先輩にも話を聞きながらですね、今、自分のやってる仕事、これからやろうとする仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを感じながらですね、本当にこの仕事のためだったら、俺は死んでもいいな。そう思えるようなね、このものを何かしら仕事の中でつかんでもらいたいと思うんですね。**

**本当にこの命を燃やして生きるということをするためには、とにかくは、このためになら俺は死ねる。このために生きて、このために死ねたら本望だと言えるものを持たないと、本当に素晴らしい人生というものをつくれません。そして、そういう死んでもいいと思えるものを持った人生が、大きな人生、また大きな人間というのをつくってくれるということになるわけですね。未来には死が待ってるわけです。過去を振り返ればね、どっかでわれわれは、生まれてきたという、生誕のときがあったわけですね。その意味で、この過去というそういう時間性からですね、人間が大きさをつくっていくための第４番目の原理は、生誕の意味を知る。なんで俺はこの時代に生まれてきたのか。その生誕の意味を知るということもですね、重要な人間の大きさをつくっていく原理です。で、人間が生まれてくるのは、なんで生まれてくるのか。みんな、なんで生まれてきたのかといったら、人間が生まれてくるのは歴史をつくるためだ。新しい時代を呼び起こすために生まれてくる。これが、このすべての人間が生まれてくる理由なんですね。生まれてくる人間がなくなってしまったら、歴史は終わる。だから、生まれてくるということは、必然的に歴史をつくるという、その生き方にこの導かれていってしまうんですね。まあ、そのことを考えたならば、このいったい俺は何をして歴史をつくろうか。そのことをですね、考えなければならない。**

**歴史をつくるということは、今まで誰もやったことがないことをしなければ、歴史はつくれません。で、人間というのは、そういうこの今まで誰もやったことがないことをするためにですね、みんな生まれてきてる。そのために何をするかって、第１反抗期、第２反抗期といってですね、その親や先生や大人たちに反抗してですね、反抗しながらですね、その自分のしたいことや、自分の考えや、自分のこの欲求、価値観というものをですね、自分がつかむという、そういうことをするわけで、新しい時代をつくろうと思ったら、新しい欲求を持たなければならない。過去の人間が誰も持ったことがないような、新しい欲求を持たないと、新しい時代はつくれないし、また、新しい時代をつくろうと思ったら、過去の人間は誰も考えたことがないような考え方や価値観というのを持たないと、新しい時代はつくれない。まあ、そのためにですね、誰かがなんか言ったとき、俺は違うな、俺はそう思わんな。そういうことをこう考えることによってですね、自分らしい考え方、過去になかった新しい考え方や価値観、過去になかった新しい欲求、そういうものを自分が持つことができるわけですね。**

**そういう、いろんな人とね、いろんな人と関わりながらですね、この自分の考え方や、自分の価値観や、自分の欲求というものをですね、しっかりと自分がつかみ取ってですね、そして、この俺はこの命をなんのために使おうか。この命を何に使って死んでいこうか。で、命を使うちゅうことは使命というんですけど、命の使いどころを何に定めてですね、生きていこうか。まあ、それが使命をつかむということになるんですけど、まあ、そういうことをですね、考えながら、われわれはこの生きなければならない。使命を持った人間と、命の使いどころをつかんだ人間と、命の使いどころがなくってですね、何してええかわからんという人間とは全然大きさが違う。人間としての価値が違うというふうにですね、言うことができます。まあ、とにかく人間は、生まれてくるのは歴史をつくるためだ。新しい時代をつくるために生まれてくるんだ。いつの時代でもですね、その若い人たちは、大人たちからね、今の若いもんはって、頼りにならんと言われて、この軽蔑されたりしてるんですけども、だけども、結果としては、今の若い人たちが、このあっという間に大人たちを越えて、より素晴らしい時代をつくってきたのが歴史の事実です。**

**まあ、その意味においてはですね、この、まあ、新入社員の方々もですね、とにかくこの青年というふうにね、言うことができる20代、30代の年代の方々はですね、この自分たちが新しい時代をつくっていくんだというね、まあ、そういうこの思いを持ってですね、この今まで誰もやったことがないことを俺はしなければ歴史がつくれない。いったい何をすることがですね、この今まで誰もやったことがないことをすることになるのか。そのためには、この今、この会社の中にある、今、社会の中にあるさまざまな問題、みんなが困ってる問題、そういう問題をですね、この俺がなんとかしたろうやないかという、そういうこの気迫を持ってですね、それにぶつかっていって、そして、その今の会社や社会にある問題を自分の手で解決していく。それがまずはですね、その今まで誰もやったことがないことをするというね、まあ、そういうこの仕事をつかむ方法であります。**

**で、命の使いどころというのはですね、会社の中の仕事でいったならば、なんかここのところ、もうちょっと便利にならんかな。なんかここのところ、納得できんなというね、まあ、そういうことが仕事をしながら出てくると思うんですけど、ここのとこ、なんかこうおかしいな。ここのとこ、なんか間違っとるんやないかな。ここのとこ、なんかもうちょっとなんとかならんのかというね、そういうことを自分が感じるっちゅうことは、いったいどういうことなのか。それはここのところ、なんかもうちょっとなんとかならんのかなということを感じるっちゅうことは、それはどういうことなのかといったら、おまえこそ、まさにそこのところをもうちょっとなんとかするためにこの時代に生まれてきた人間なんだ。この時代に生まれてきたから、そういう問題にぶつかることができたんだ。おまえこそ、まさにそこのところ、もうちょっとなんとかするために、この時代に生まれてきたので、君は今、そこにいるのは、今すぐその仕事をするためなんだ。それが君の使命だ。それが君の命の使いどころだということをね、教えてくれてる。これが、この仕事をしながら、なんかここのところ、納得できんな。なんかここのとこはもうちょっと便利にならんかな。そういうことを感じるというね、現実の違和感という問題意識の持ってる意味です。自分自身がこの時代に生まれてきたということは、この時代に存在する、この時代から生まれてきた問題というものをですね、自分が解決して、そして、その今までになかった新しい何かをつくり出していく。それがこの自分の生誕の理由なんだ。そういうふうにですね、この考えていかなければならない。そのことによって、自分の命の使いどころというものをね、今ある問題から自分がこの獲得する。そういうことができる人間と、そういうこの自分の命の使いどころを持たない人間、自分の命の使いどころが定まらない人間とではね、全然、人間としての大きさが違ってくる。値打ちが違ってくるというふうにね、言うことができます。**

**まあ、とにかく、この精神的な原理としてですね、人間の大きさというものをつくっていく、その方法論というものがですね、これだけあるわけですね。全体としては、空間的全体性、時間的全体性という、その両面からですね、この人間の大きさをつくる原理というものを考えていくと、こういう方法論が見えてくるわけです。人間の大きさをつくるためにはどうしたらいいのかという方法論が見えてくる。ぜひこのことをですね、このアサヒグローバルの会社の中で仕事をしながらですね、こういうこの原理をどういうふうに仕事の中に使って、自分を鍛えようか、自分を成長させていこうかというふうに考えて生きてもらいたいと思うんですね。まあ、とにかく人格を磨くということはね、プロとして仕事をしていくことにおいて、避けて通れないですね、課題であります。プロとして生きるためには、お客さんにも、また仲間にもですね、このさすがだね、君はすごいねとこう言ってもらえるね、そういうものを何かしら自分が持たなければなりません。そして、このいろんな人と関わってですね、そして、このいろんな人と共に仲よく生きていく力というものをつくっていかないと、社会においてはこの成長するというか、自分が出世するとかね、そういうこともできませんし、また自分の周りに嫌な人が増えてくれば、自分は不幸ですし、自分の周りに仲よくやっていける人が増えてくれば、自分は幸せです。その意味でもですね、いろんな考え方や、いろんな感じ方、いろんな価値観の人と仲よく関わっていく、人間の大きさというものは非常に大事なですね、プロとしての努力の目標になる課題であると思います。まあ、ぜひそのことも考えて、今日の話をこれからの仕事の中で、また人間関係の中で生かしてですね、自分の成長を、まあ、考えてみてもらいたいと思うんですね。ということで、今日の人格の大きさをつくる精神的原理という話は終わりにします。どうもありがとうございました。**